

街路事業『都市計画道路3・3・6号東合川野伏間線』に伴う埋蔵文化財発掘調査

日渡遺跡群Ⅳ

—白川遺跡 第3・4次調査—

久留米市文化財調査報告書 第224集

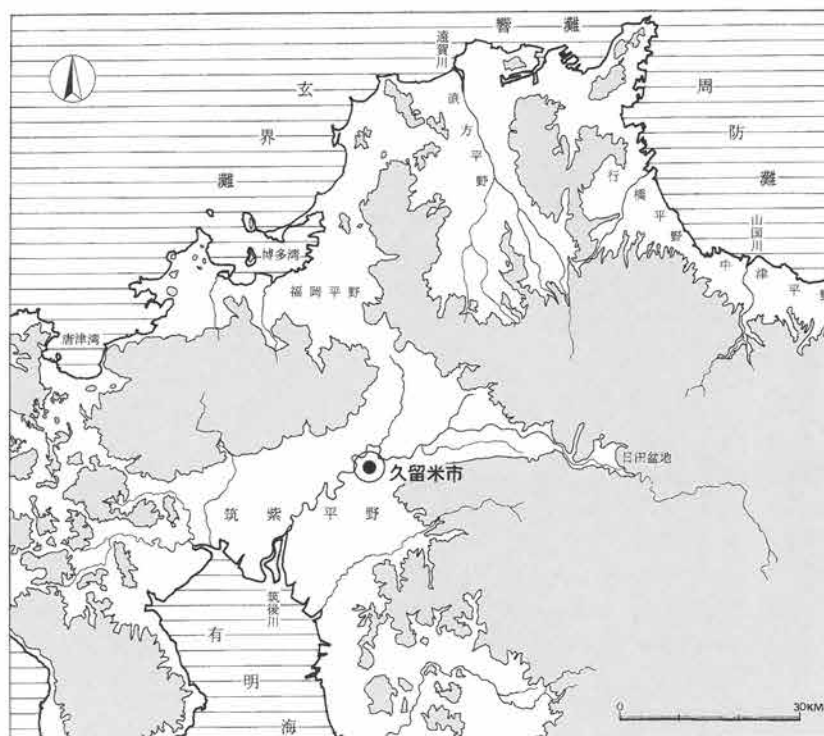
平成18(2006)年
久留米市教育委員会

街路事業『都市計画道路3・3・6号東合川野伏間線』に伴う埋蔵文化財発掘調査

日渡遺跡群Ⅳ

—白川遺跡 第3・4次調査—

久留米市文化財調査報告書 第224集



序

豊かな水と緑に囲まれた久留米市では、21世紀の都市づくりの指針として「新総合計画基本構想」を策定しました。その中でも重要なものの一つとして、市内を通過する幹線道の慢性化した渋滞状況を緩和することを目的とした、都市計画道路網の整備が挙げられます。今回の調査の契機となった「東合川・野伏間線」もその一環として計画され、市内の渋滞緩和だけではなく、市内東部と南部を結ぶ新たな動脈として期待されている路線です。

この「東合川・野伏間線」の建設に先立ち、久留米市教育委員会では平成12年度より「日渡遺跡群」の発掘調査を開始し、現在も調査を継続しているところです。

本書では、「日渡遺跡群」の調査報告書の4冊目として、平成16年度に実施した日渡遺跡群・白川遺跡第3・4次調査の成果を収録しています。

このような本書が、学術研究だけでなく学校現場や社会教育の資料として活用されることを願うとともに、文化財保護の理解と普及の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査に対し、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ、関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成18年2月28日

久留米市教育委員会
教育長 石川 集 充

例 言

1. 本書は、「都市計画道路 3・3・6 号東合川野伏間線」の街路事業に先立ち、平成16年度に発掘調査を実施した白川遺跡第 3・4 次調査の成果報告である。
2. 発掘調査は、久留米市教育委員会が主体となり、久留米市役所文化観光部文化財保護課の水原道範・小澤太郎が担当した。調査担当者および、本市で定める遺跡の略記号・調査番号は下記の通りである。

遺跡名 (調査回数)	担当者	略記号	調査番号
白川遺跡 (第 3 次)	水原・小澤	S G O	200308
白川遺跡 (第 4 次)	小 澤	S G O	200310

3. 本書に使用した遺構実測図は、各調査担当者で大淵文子を作成し原口妙子が補助した。また、遺物実測は小澤と臨時職員の丸山裕見子が行ない、拓本は小澤、製図は小澤・水原と非常勤職員の米澤美詠子が行った。
4. 空中写真を除く遺構写真は、各調査担当者が撮影した。遺物写真については、以下の器材を用い園井正隆の指導の下、小澤が撮影した。

遺構写真：カメラ【ミノルタ X-700・マミヤ RB67】、フィルム【白黒フィルム 35mm 版・6×7 版 (コダック T-MAX100)・カラーリバーサル 6×7 版 (コダック エクタクローム EPP)】

遺物写真：カメラ【トヨビュー 45G II】、フィルム【白黒フィルム (コダック T-MAX100 (6×9 版))】
なお、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。

5. 本書に記した方位はすべて座標北を示す。また基準点の座標値は国土調査法第 II 座標系 (旧座標系) を使用した。
6. 本書に使用した遺構標記は下記の略号による。
S D……溝 S K……土坑 S P……柱穴・ピット S T……墳墓 S X……不明遺構
7. 調査に関わる遺物、及び記録類は、すべて久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管され、活用される予定である。
8. 本書の執筆は、Ⅲ章を水原、その他を小澤が担当した。また全体の編集は、小澤が行った。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査の体制	2
II. 遺跡の位置と環境	3
III. 第3次調査	5
1. 調査の経過	5
2. 遺構と遺物	6
3. まとめ	8
IV. 第4次調査	9
1. 調査の経過	9
2. 遺構と遺物	10
3. まとめ	20
報告書抄録	巻末

挿図目次

久留米市の位置【作図・製図：小澤】	巻頭
図1 東合川野伏間線の事業区域と調査地点の位置 (1/5,000) 【作成：小澤】	折込
図2 日渡遺跡群周辺の縄文遺跡の分布 (1/25,000) 【作成：小澤】	4
図3 第3次調査区平面図 (1/100) 【原図：水原・小澤・大淵／製図：水原】	5
図4 SK1～3、ST4平面・断面図 (1/40) 【原図：水原／製図：米澤】	6
図5 ST5平面・断面図 (1/20) 【原図：水原／製図：米澤】	7
図6 出土土器実測図 (1/4) 【原図：丸山／製図：米澤】	8
図7 第4次調査区中央区平面図 (1/200) 【原図：小澤・大淵／製図：小澤】	9
図8 東区平面図 (1/200) 【原図：小澤・大淵／製図：小澤】	10
図9 西区平面図 (1/200) 【原図：小澤・大淵／製図：小澤】	11
図10 西区西壁面土層図 (1/150) 【原図・製図：小澤】	11
図11 主要遺構の分布 (1/400) 【作図・製図：小澤】	12
図12 溝土層及び断面図 (1/40) 【原図・製図：小澤】	13
図13 土坑平面・断面図 (1/40) 【原図：小澤・大淵／製図：小澤】	15
図14 出土遺物実測図① (1/4、1/2) 【原図・製図：小澤】	16
図15 出土遺物実測図② (1/4、1/2) 【原図・製図：小澤】	17
図16 日渡遺跡群の周辺地形と縄文遺跡の分布 (1/5,000) 【作図・製図：小澤】	20

※図3～6は、本文Ⅲ.第3次調査、図7～16は、同じくⅣ.第4次調査の挿図である。

表目次

表1	日渡遺跡群の発掘調査地一覧	1
表2	日渡遺跡群の発掘調査報告書一覧	1
表3	第4次調査出土遺物観察表(1)	18
表4	第4次調査出土遺物観察表(2)	19

図版目次

図版1	(1) 第3次調査区全景(北から)	図版7	(1) S D 1・5出土縄文土器(表)
	(2) S K 1全景(西から)		(2) S D 1・5出土縄文土器(裏)
	(3) S K 2全景(北から)		(3) S D 1・5・60・95出土石器(表)
図版2	(1) S K 3全景(南から)		(4) S D 1・5・60・95出土石器(裏)
	(2) S T 4全景(北から)		(5) S D 1出土土師器
	(3) S T 5遺物出土状況(西から)		(6) S D 100出土土師器
	(4) S D 6全景(西から)		(7) S D 100出土土師器
	(5) S K 1出土土器		(8) S D 100出土土師器
	(6) S T 5、谷部埋土出土土器	図版8	(1) S K 15・25・35出土縄文土器(表)
図版3	(1) 第4次調査区中央区全景(西から)		(2) S K 15・25・35出土縄文土器(裏)
	(2) 西区全景(東から)		(3) S K 20出土縄文土器(表)
図版4	東区全景(東から)		(4) S K 20出土縄文土器(裏)
図版5	(1) S D 1全景(北から)		(5) S K 30出土縄文土器①(表)
	(2) S D 1 C-C' (北から)		(6) S K 30出土縄文土器①(裏)
	(3) S D 1 B-B' (北から)		(7) S K 30出土縄文土器②(表)
	(4) S D 5全景(北から)		(8) S K 30出土縄文土器②(裏)
	(5) S D 100全景(西から)	図版9	(1) S K 45・70・80出土縄文土器(表)
	(6) S K 15遺物出土状況(北から)		(2) S K 45・70・80出土縄文土器(裏)
	(7) S K 15完掘状況(西から)		(3) S X 65出土縄文土器(表)
図版6	(1) S K 30遺物出土状況(南から)		(4) S X 65出土縄文土器(裏)
	(2) S K 30完掘状況(南から)		(5) 地山上面出土縄文土器
	(3) S K 35完掘状況(北から)		(6) S K 15出土石器
	(4) S K 45完掘状況(北から)		(7) S K 15・35・85出土石器(表)
	(5) S K 50完掘状況(北から)		(8) S K 15・35・85出土石器(裏)
	(6) S K 80遺物出土状況(南から)	図版10	第4次調査地上空から西方を望む
	(7) S K 105完掘状況(西から)		
	(8) S K 110完掘状況(西から)		

I. はじめに

1. 調査にいたる経緯

平成12年9月4日付で久留米市建設部道路課より事前審査依頼（12道383号）が久留米市教育委員会文化財保護課へ提出された。これが街路事業「都市計画道路3・3・6号東合川野伏間線」（以下、東合川野伏間線と略す。）の、上津町上津荒木信号から国分町北島信号間の建設工事に伴う一連の発掘調査の契機である。文化財保護課では、過去の発掘調査や遺跡分布図、周辺の試掘データ等を踏まえた上で、開発対象地内において用地買収が完了した部分を順次試掘した。まず、平成12年2月に11箇所、平成12年12月に4箇所について試掘調査を行ない、埋蔵文化財包蔵の有無について依頼者側へ口頭で回答し、今後の対応について協議した。その結果、用地買収と工事の進捗状況を考慮し、遺跡の存在が確認された地点について、順次公共受託事業による発掘調査を行うことで協議が成立した。

遺跡の名称については、路線となる上津荒木信号から北島信号間には大きく2つの谷が入り込み、それによって分けられる3つの台地上の遺跡を西から順に、日渡遺跡・正福寺遺跡・白川遺跡とした。さらにこの3遺跡を日渡遺跡群と総称することに決定し、平成13年1月の正福寺遺跡第4次調査を皮切りに、路線地内の発掘調査を開始した。

表1には、今年度までの日渡遺跡群における発掘調査地を掲載している。この中で注意が必要なのは、正福寺遺跡第5次調査と第7次調査である。平成13年度の第5次調査は、前年度末調査であった第4次調査地D区の下層遺構（縄文遺構）を新年度に調査したものである。また、平成16年度の第7次調査については、平成15年度に引き続き縄文遺構の掘り下げを継続したために、整理・登録作業上、混乱をきたさないよう、前年度と同じ調査次数・略記号・調査番号を付している。なお、表2には今年度までの日渡遺跡群の調査報告書および概報の一覧表を掲載する。

表1 日渡遺跡群の発掘調査地一覧

年度	地点番号	遺跡名	次数	略記号	調査番号	時代	調査面積	調査期間	担当者	報告書
H12	①	正福寺遺跡	第4次	SHJ-4	20018	縄文・平安・中世・近世	1,184㎡	2001. 1.11～2001. 3.31	園井正隆	a
	②	正福寺遺跡	第5次	SHJ-5	200103	縄文	428㎡	2001. 4. 5～2001. 6.18	水原道範	a
H13	③	正福寺遺跡	第6次	SHJ-6	200108	奈良・平安・鎌倉	1,085㎡	2001. 6.21～2001. 9.11	小澤太郎	a
	④	日渡遺跡	第2次	HWT-2	200111	弥生・室町	664㎡	2001. 7.23～2001. 9.28	水原道範	b
H14	⑤	日渡遺跡	第3次	HWT-3	200205	弥生・室町	1,193㎡	2002. 5.13～2002. 9.14	小澤太郎	c
	⑥	日渡遺跡	第4次	HWT-4	200220	縄文・奈良・平安・中世	1,043㎡	2002.11.12～2003. 3.10	熊代昌之	c
	⑦	白川遺跡	第3次	SGO-3	200308	平安・近世	156㎡	2003. 6.13～2003. 6.30	水原・小澤	d
H15	⑧	白川遺跡	第4次	SGO-4	200310	縄文・平安・近世	1,052㎡	2003. 6.30～2003.10.31	小澤太郎	d
	⑨	正福寺遺跡	第7次	SHJ-7	200313	縄文・鎌倉	1,023㎡	2003. 7.30～2004. 3.31	熊代・水原	e(概報)
H16	⑩	正福寺遺跡	第7次	SHJ-7	200313	縄文・鎌倉	660㎡	2004. 4. 8～2004. 8.27	熊代・白木守・水原	e(概報)
H17	⑪	白川遺跡	第5次	SGO-5	200503	平安	989㎡	2005. 4.21～2005. 8. 8	小澤太郎	未報告

表2 日渡遺跡群の発掘調査報告書一覧

記号	書名	収録遺跡	シリーズ名	シリーズ番号	刊行年月日	編集者
a	日渡遺跡群	正福寺遺跡 第4・5・6次調査	久留米市文化財調査報告書	第188集	2003/3/31	園井正隆
b	日渡遺跡群Ⅱ	日渡遺跡 第2次調査	久留米市文化財調査報告書	第201集	2004/3/31	水原道範
c	日渡遺跡群Ⅲ	日渡遺跡 第3・4次調査	久留米市文化財調査報告書	第203集	2004/6/15	小澤・熊代
d	日渡遺跡群Ⅳ	白川遺跡 第3・4次調査	久留米市文化財調査報告書	第224集	2006/2/17	小澤太郎
e	日渡遺跡群正福寺遺跡	正福寺遺跡 第7次調査	久留米市文化財調査報告書	第233集	2006/3刊行予定	熊代昌之

2. 調査の体制

発掘調査年度である平成15年度と報告書作成年度である平成17年度における調査体制は以下のとおりである。本市は、平成17年2月5日に周辺4町（田主丸・北野・三潁・城島町）と合併し、同年4月1日の組織改変で、文化財保護課が教育長部局から市長部局へと移った。文化財事務については、教育委員会の業務をそのまま文化財保護課が引き継ぐという市長と教育長間の取り交わしがあり、これに基づき報告書作成業務も行っている。

【発掘調査：平成15年度】

調査主体：久留米市教育委員会	教育長	石川集充
調査総括：教育文化部	部長	石原廣士
文化財保護課	課長	関 知彦
課長補佐兼主査		堤 諭吉
主査		立石雅文
事務主査		松村一良（事前審査・調整）
		大石 昇（事前審査・調整）
庶務担当		権藤節子
調査担当		水原道範（第3次調査）・小澤太郎（第3・4次調査）
街路事業関係：建設部	部長	稲益富支典
道路課	課長	佐久間鶴夫
	課主査	伊藤 彰
	技術主査	原口 登
	担当	二本木清隆

【報告書作成：平成17年度】

調査主体：久留米市教育委員会	教育長	石川集充
調査総括：久留米市文化観光部	部長	緒方眞一
文化財保護課	課長	関 知彦
課長補佐兼主査		立石雅文
事務主査		松村一良（調査総括）
		大石 昇（事前審査・調整）
		近澤康治（事前審査・調整）
庶務担当		権藤節子
報告書担当		水原道範・小澤太郎
街路事業関係：都市建設部	部長	稲益富支典
道路課	課長	野田俊作
	課主査	田中了嗣
	技術主査	古賀稔二（街路）
	担当	木村彰人・平尾恭信

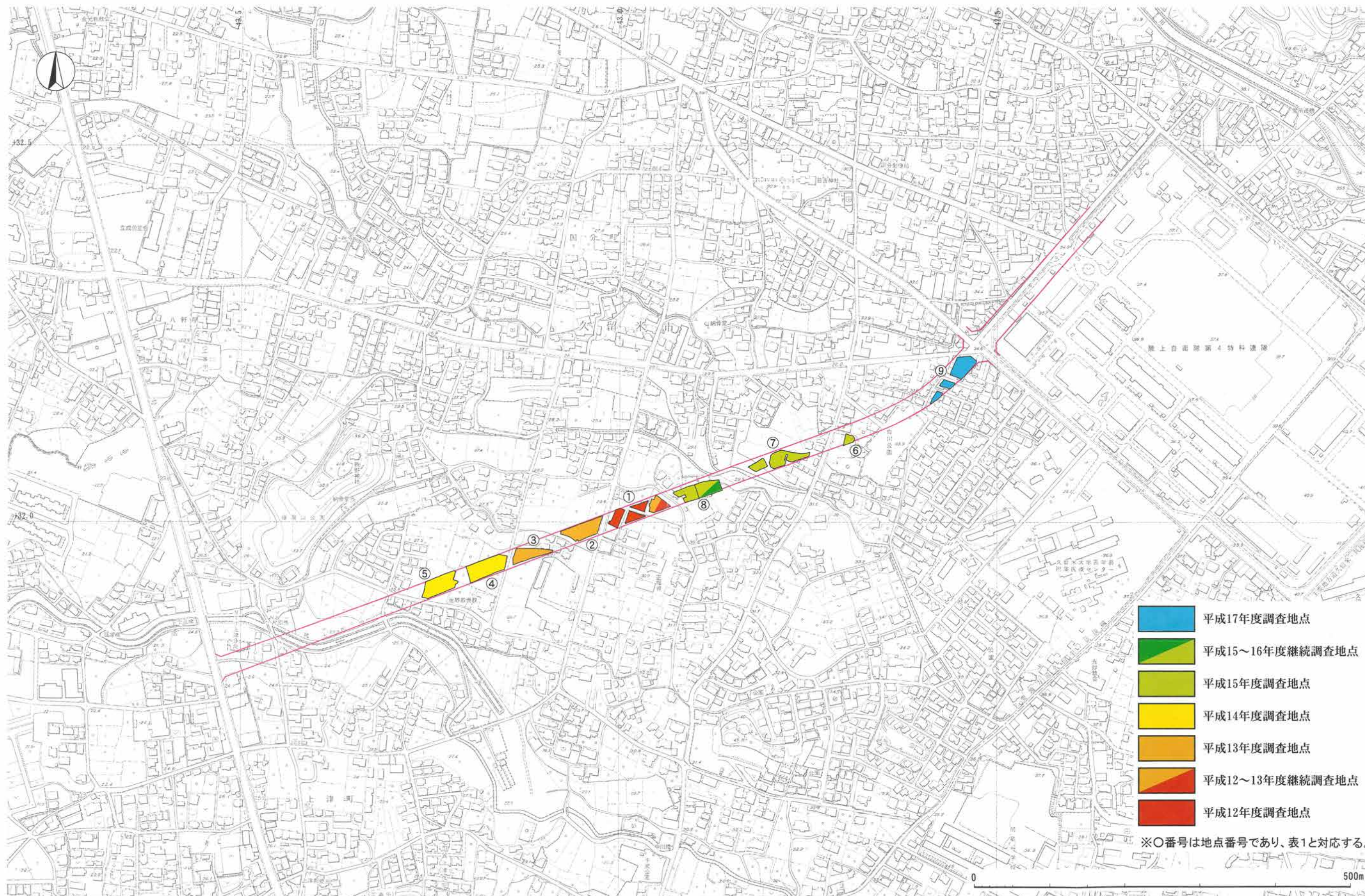


図1 東合川野伏間線の事業区域と調査地点の位置 (1/5,000)

Ⅱ．遺跡の位置と環境

本遺跡群は、耳納山地の西端に位置する飛岳から、更に西方へ派生する標高約30mの洪積台地上に立地する。一帯には、耳納山地からの伏流水を源とする良質な湧水点が点在しており、谷頭から湧き出した湧水は小河川となって谷と台地が入り組んだ複雑な地形を形成している。昭和40年代頃までは、遺跡群の北方一帯では川苔が盛んに生産され、久留米の特産品として全国的にも著名な存在であった。その後、急速な宅地化によって苔田は姿を消し、現在はその面影もない。このような豊富な湧水に恵まれていたからこそ、清らかな川という意味で「白川」^{しらごう}の地名が起こったのかもしれない。

さて、本遺跡が所在する国分町は、その地名の起こりとなった筑後国分寺が奈良時代に設置されるなど、歴史的にも重要な位置にあるが、ここでは、縄文時代の遺跡について概観する。

日渡遺跡群 桃太郎川北岸の日渡遺跡第4次調査（表2-c）では、包含層から押型文土器片や姫島産黒曜石剥片・水晶・チャートなど、早期の遺物が出土している。他にも中・後期の阿高式・北久根山式土器や石器等が出土・採集されている。次に、名入川（金丸川）^{な いり}北岸には、前期の轟A式・同C式・曾畑式と後期の北久根山式土器が出土した宮ノ脇遺跡、轟C式・曾畑式・北久根山式が採集されている政所遺跡がある。大木下遺跡では、国分寺跡発掘調査の際に、後期の西平式・三万田式土器が出土し、日吉神社境内遺跡からは、晩期の土器が採集されているという。さらに、白川遺跡周辺では、中期の阿高式から後期の北久根山式に及ぶ大量の遺物が出土した正福寺遺跡（表2-a）をはじめ、中期～後期の阿高式・鐘崎式・北久根山式土器が採集され、人頭大の川原石を敷き詰める配石遺構もあったという名入遺跡などがある。特に注目されるのが、正福寺遺跡第7次調査である。谷部分からは後期のドングリピット多数や編み物、直柄石斧をはじめとする各種木製品などを出土している（表2-e）。

周辺の遺跡 久留米市の中央部、耳納山地の西麓には多くの縄文遺跡が分布している。その中には、それぞれ複数の遺跡で構成される3つの拠点集落群が認められる。これらを北から野口群・横道群・日渡群と仮称する。日渡群と横道群は台地周辺の湧水地周辺に展開し、野口群は自然堤防上に位置するなど立地に違いがある。群を構成する遺跡単位では空白の時期も存在するが、群の領域全体で見れば居住域は移動しながらも、早期から晩期まで長期間にわたって継続的に集落が維持されている。野口ー横道群間は約1km、横道ー日渡群間は約2kmと近接している。狩猟採集民の生業活動領域は半径10km（徒歩約2時間）圏内といわれており、これらの拠点集落群間に恒常的な交流があったことは想像に難くない。一方、日渡群の南約1kmに位置する高良台や、横道群東方にそびえる耳納山地には、石鏃やスクレイパーなどの石器類を出土（表採）する遺跡が散在しており、これらは立地や遺物の内容から見て、狩猟場であったと考えてよい。また、図2の範囲外ではあるが、日渡群の西方約6kmの安武地区遺跡群では、早期を中心とする落とし穴遺構が200基以上確認されている。花粉分析によると一帯はススキやタケ亜科が繁茂する草原で、恐らく小谷の水辺に集まるシカやイノシシといった動物を狩猟対象としたものであろう。これらの狩猟場は拠点集落群から徒歩2時間以内で到達可能である。なお、後～晩期になると遺跡数が増加する。新たに営まれる遺跡の立地を見ると、それまでの拠点集落群の領域から外れるものが目立ち始める。すなわち、高良川の両岸や筑後川の自然堤防上、低台地縁辺部など、より低地へと進出し拡散する傾向が認められる。こうした集落の立地の変化は、次代の弥生集落の立地へと受け継がれる。

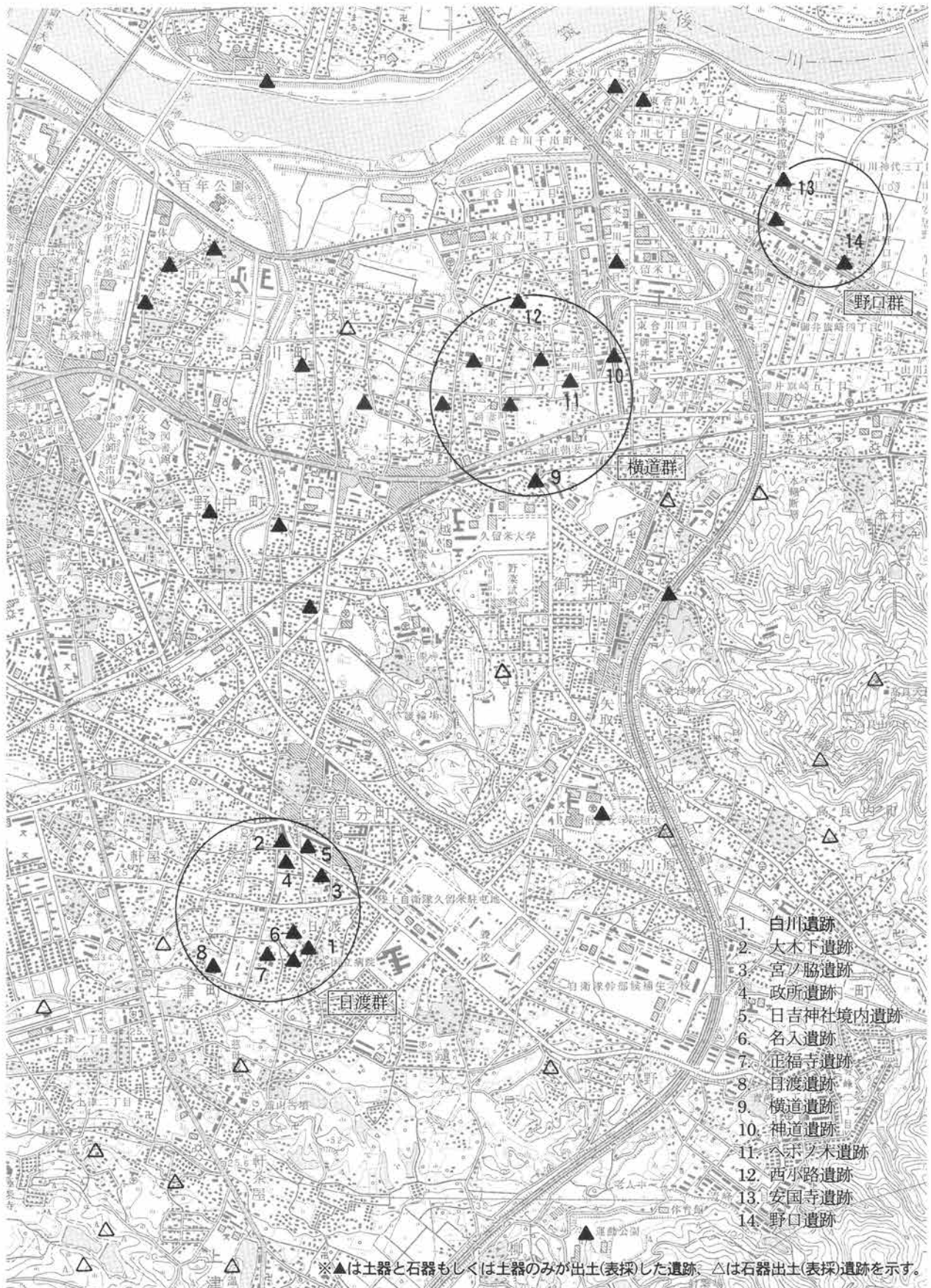


図2 日渡遺跡群周辺の縄文遺跡の分布 (1/25,000)

Ⅲ．第3次調査

1. 調査の経過

第3次調査地は、次章で報告する第4次調査地と同一台地上、第4次調査地の東側隣接地に所在する。

この台地は本調査地から第4次調査地側に向かって傾斜しており、第4次調査地西端部が台地端部となり、正福寺遺跡が所在する台地とは金丸川の支流である名入川が流れる谷によって隔てられているが、この谷は本調査地西部にも一部入り込んでいる。

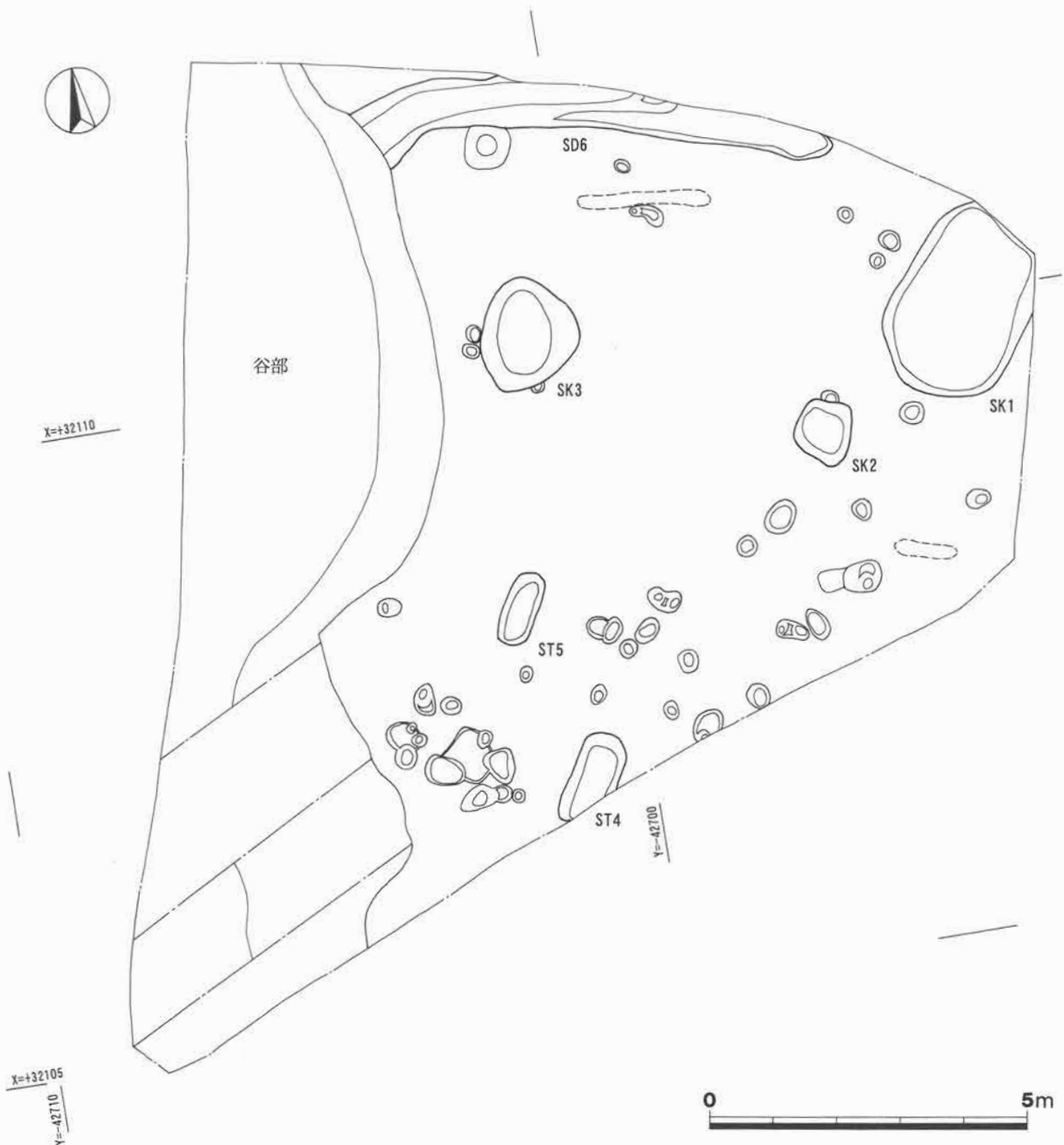


図3 第3次調査区平面図 (1/100)

調査は重機によって表土除去作業を行った後、人力で遺構検出・掘り下げを行っている。図面記録は全体的実測を遺跡調査汎用システム「カタタ」で行い、更に個別実測（1/10）を行い、補足している。写真記録はモノクローム35mm・6×7、カラーリバーサル6×7で撮影し、記録した。

2. 遺構と遺物

対象地の現状は平坦な土地であるが、近隣住民の方から聞き取り調査を行ったところ、戦後間もない頃に道路を通すために谷を埋め立てていたことが判明した。

調査の開始にあたり、対象地南西端部を試掘したが、谷の浅い部分では90cm、最も深い部分では約2m掘り下げたものの底面にまでは至らず、著しい湧水によって調査区の壁面が次々と崩落し、隣接する道路が陥没する恐れがあったことから、すぐに埋め戻している。

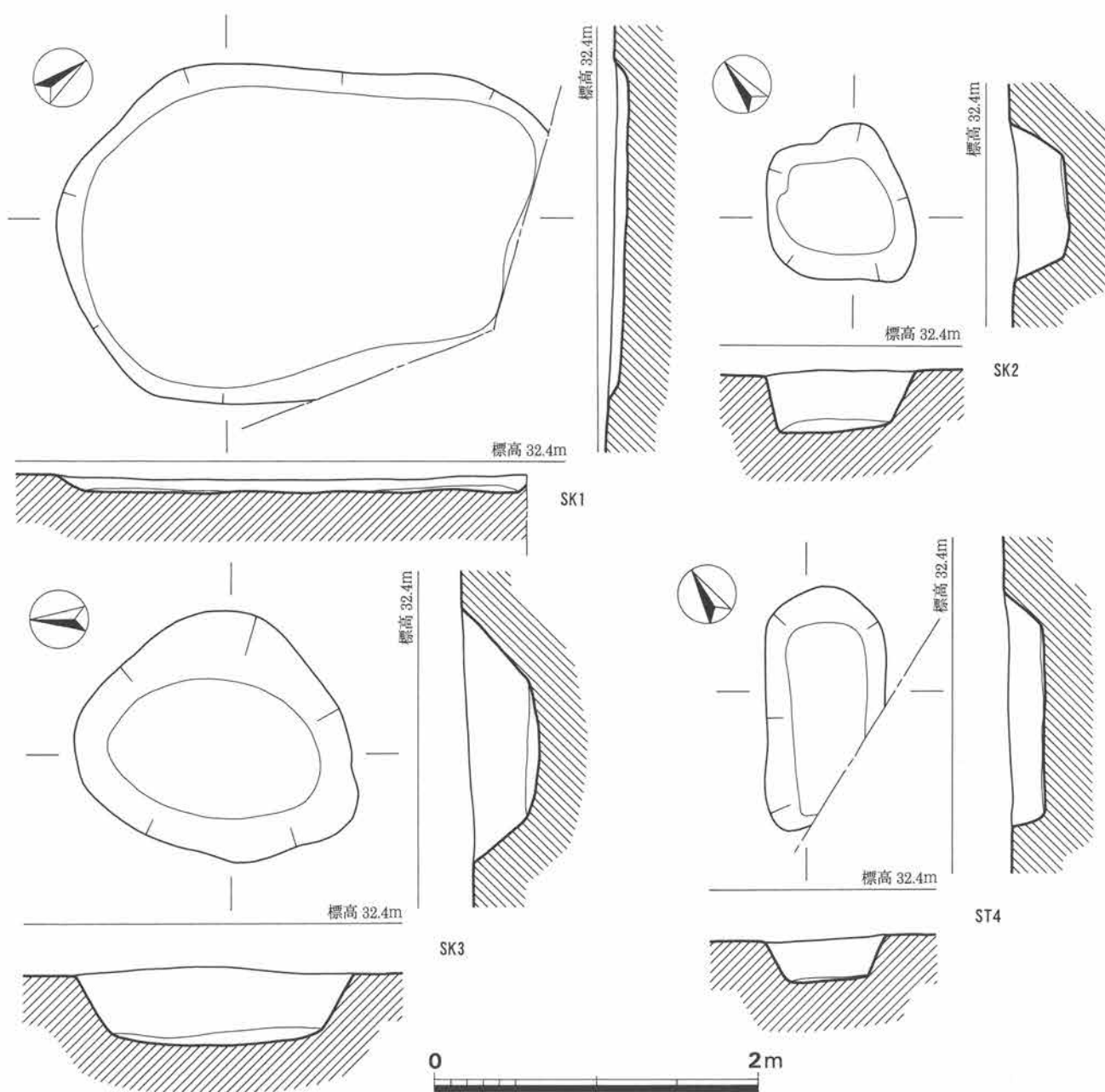


図4 SK1～3、ST4平面・断面図（1/40）

谷部を除いた部分については、遺構検出面は北東部から南西部へ向かって傾斜しており、南西部の谷部が始まる直前の部分では30cmの厚さで暗褐色土の盛土がなされ、それを除去すると遺構検出面に達するが、東北端部のSK1検出部付近では著しく削平を受け、遺構検出面が既に露出した状態であった。

a) 溝

SD6 (図版2-(4)) 調査区北端部を東西走行する溝。7.5m分を検出した。遺構の北側は調査区外へ延びており、溝幅60cm～1.0m。西端部は谷部へ達している。断面はU字状を呈し、深さは60～70cm。底面レベルは東側から西側へ向かって深くな

り、東端部と西端部では約30cmの比高差がある。埋土は淡い褐色土に少量の黄色土が混入した一括埋土である。

b) 土坑

SK1 (図4、図版1-(2)) 調査区北東端部で検出した土坑。一部調査区外へ延びているが、平面形は楕円形。長軸2.9m分を検出、短軸は2.1mを測る。底面は平坦で、深さは10cm前後を測るが、著しい削平を受けて遺構検出面が露出した状態であったことから、本来はもっと深いものと見られる。埋土は暗褐色土中に多量の淡黄色土ブロックが混入した土である。

SK2 (図4、図版1-(3)) SK1の南西側で検出。平面形は一辺90cmを測る隅丸方形を呈する。底面は南側へ傾斜し、深さは60～70cm。埋土は淡い褐色土中に少量の黄色ブロック土が混入した土である。

SK3 (図4、図版2-(1)) 調査区中央部で検出。平面形は楕円形を呈し、長軸2.3m、短軸2.0m。壁面は緩傾斜し、底面は平坦で深さは60cm。埋土は淡褐色土中に多量の黒色・黄色土ブロックを含む。

c) 土壙墓

ST4 (図4、図版2-(2)) 調査区南端部中央で検出。人骨や副葬品などは出土していないが、平面形が隅丸長方形を呈するその形状などから土壙墓と判断した。遺構の南部は調査区外へ延びるが、長軸1.5m、短軸75cmを測る。底面は船底状を呈し、深さは70cm。主軸方位はN-32°-E。埋土は褐色土に多量の黄色ブロック土が混入した一括埋土。

ST5 (図5、図版2-(3)) ST4の1.7m北側で検出。平面形は隅丸長方形であるが、南側が北側よりもやや広がり気味となるため楕円形に近い形状を呈する。長軸1.2m、短軸50cm、深さ35cmを測り、主軸方位はN-26°-E。この遺構の南側からは、底面よりも約5cm浮いた状態で、副葬品と考えられる完形の土師器坏2点が出土した。なお、人骨は検出されていない。

d) 出土遺物

今回の調査ではパンコンテナー1箱分、総点数469点の遺物が出土した。その内訳は、土師器397点、黒色土器A類17点、同B類10点、近世以降の国産陶磁器18点、瓦2点、釘状鉄製品3点、スサ入り焼土塊12点、磨消縄文を有する縄文土器1点、黒耀石剥片9点、サヌカイト剥片1点、チャート剥片1点である。これらの遺物は図示した遺物を除けば全て細片資料である。

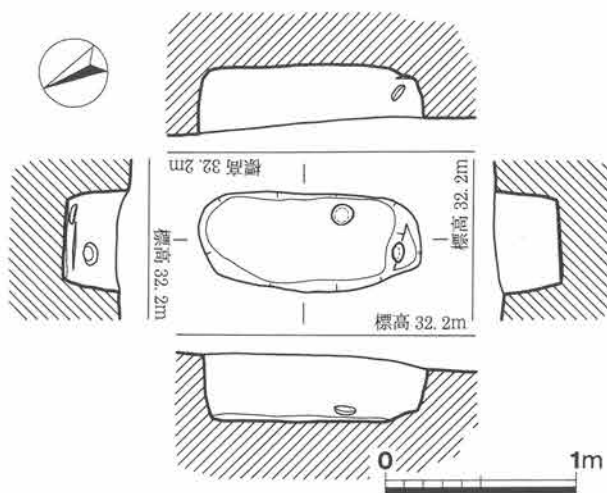


図5 ST5平面・断面図 (1/20)

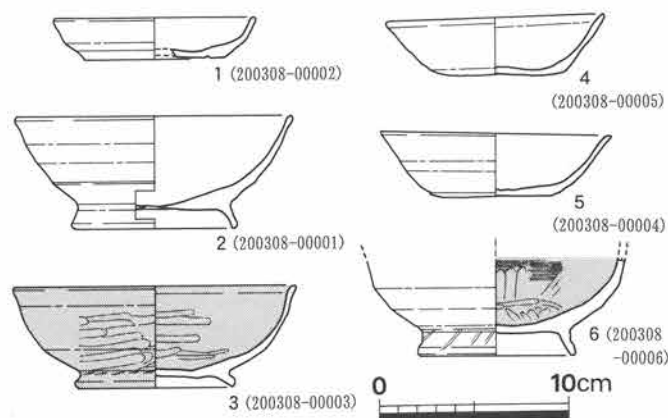


図6 出土土器実測図 (1/4)

面共ににぶい橙色。胎土には赤色粒子が多量混入し、底面は焼成後に穿孔されている。3は内・外面共に黒く燻した黒色土器B類の碗。体部の約半分を欠損する。復元口径15.0cm、高台径8.5cm、器高5.4cm。胎土には金雲母と赤色粒子を多量含む。内・外面のミガキは雑で、内底・外底部には焼成前に記された「×」の線刻がある。

SK 2 出土遺物 土師器細片 1点と縄文土器 1点が出土したのみ。

SK 3 出土遺物 土師器細片 2点が出土したのみ。

ST 4 出土遺物 土師器細片20点、黒色土器A類 1点、釘状鉄製品 1点の細片資料が出土。

ST 5 出土遺物 (図6-4・5、図版2-(6)) 図示した土師器2点の他、土師器細片31点が出土。4・5は土師器の坏で、2点共完形品である。4は底面南端部から出土。口径11.6cm、底径7.1cm、器高3.1cm。色調は内・外面共に橙色で、胎土には多量の赤色粒子と少量の石英が含まれている。底面はヘラ切り離した後未調整で、簾状圧痕が残る。5は底面南東側から出土。口径12.2cm、底径6.9cm、器高3.4cm。色調は内・外面共に橙色で、胎土には赤色粒子を多量含む。底面はヘラ切り離した後、未調整。

SD 6 出土遺物 土師器片21点、肥前系国産陶磁器15点、棧瓦 1点、釘状鉄製品 2点、黒耀石剥片 2点が出土。

谷部出土遺物 (図6-6、図版2-(6)) 土師器220点、黒色土器A類13点、同B類 6点、丸瓦 1点、陶器 2点が出土。6は口縁部を欠損する黒色土器B類の碗。底径8.4cm、残存器高5.1cm。外面の色調はにぶい黄橙色で、胎土には多量の赤色粒子と少量の石英を含む。内・外面共に丁寧なミガキが施されている。

3. まとめ

今回の調査では、出土遺物から、平安時代の10世紀代の遺構と考えられる土坑SK 1～3、土墳墓ST 4・5、及び18世紀代以降と考えられる東西溝SD 6を検出した。

土坑・土墳墓が営まれた時期の調査地周辺を見ると、半径約300mの範囲内には筑後国分寺を始め、9世紀前半代に創建された伝承を持つ正福寺があり、また、私印と見られる「朝」銘銅印や越州窯系青磁碗、長沙窯系黄釉褐彩水注など10世紀初頭の遺物が出土し、正福寺の創建に係る有力者が存在したと考えられる日渡遺跡第1次調査地も存在するなど、当時の調査地近辺が繁栄していた様子が伺われる。

本調査地は台地端部に立地し、土墳墓が存在することから、集落の周縁部と考えられよう。

Ⅳ. 第4次調査

1. 調査の経過

第4次調査地は、南北道路を挟んで第3次調査地の西向かいに隣接している。また、正福寺遺跡第7次調査地は、名入川によって形成された谷を挟んで西側に位置する。

調査は、排土置き場の関係から一括して掘削することが出来ず、道路予定地内を2箇所に分割して行うことにした。その後、隣接する正福寺遺跡第7次調査において、谷部分から縄文後期のドングリピットや網カゴが多数出土したために、試掘段階では対象外としていた谷部にも調査区を設定することにした。こうして対象地を作業工程上3回に分割して調査し、それぞれ東区・中央区・西区と呼称した。調査の順序としては、まず中央区から着手し、その後東区へ、最後に谷部分の西区へと、掘削と反転を繰り返しながら進めていった。

図面記録は、平板図(1/100)の他、全体の平面図は、遺跡調査汎用システム「カタタ」で測量している。

写真記録は、カラーリバーサル35mm、モノクロは35mmと6×7で撮影した。全体写真については、

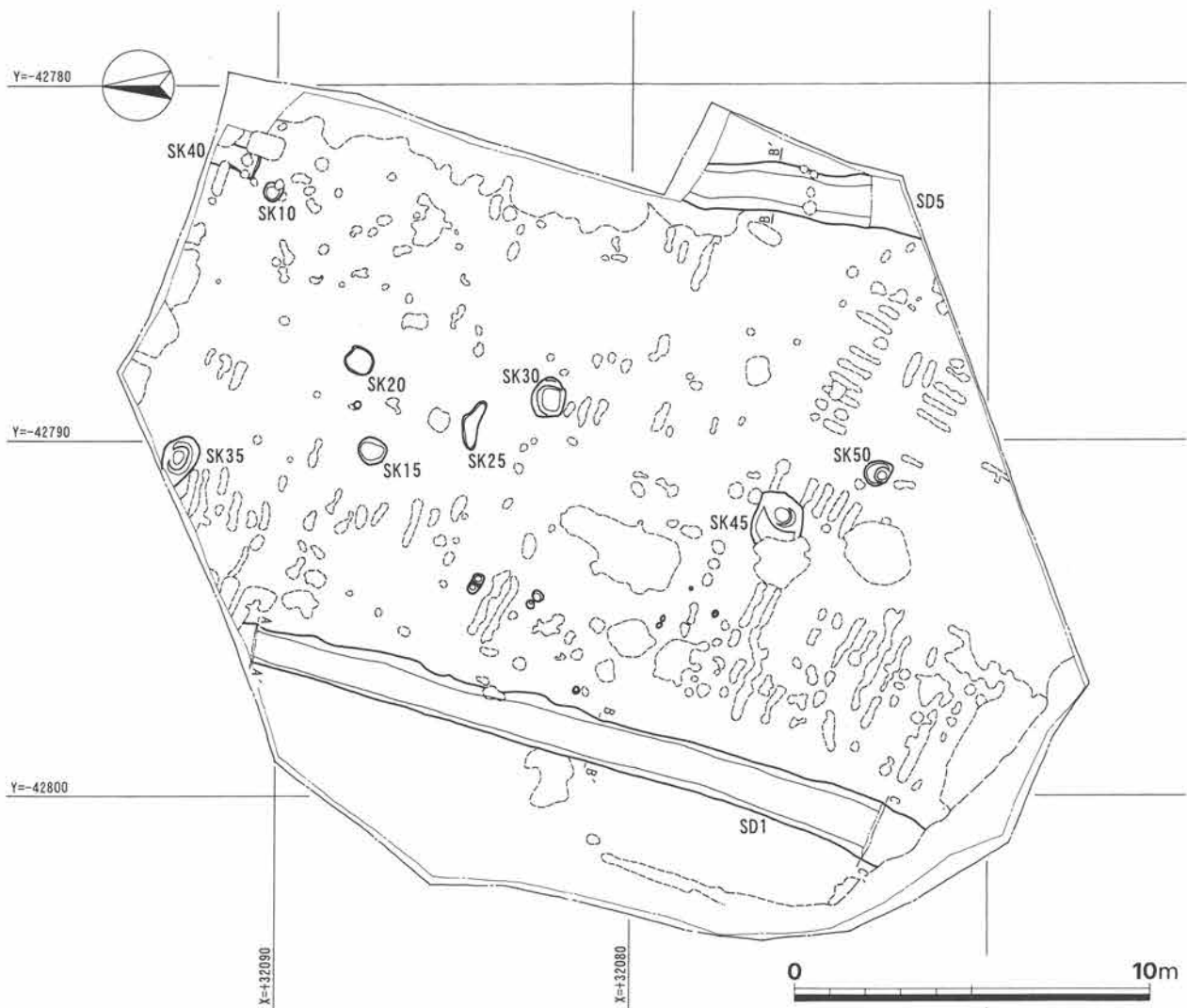


図7 第4次調査区中央区平面図 (1/200)

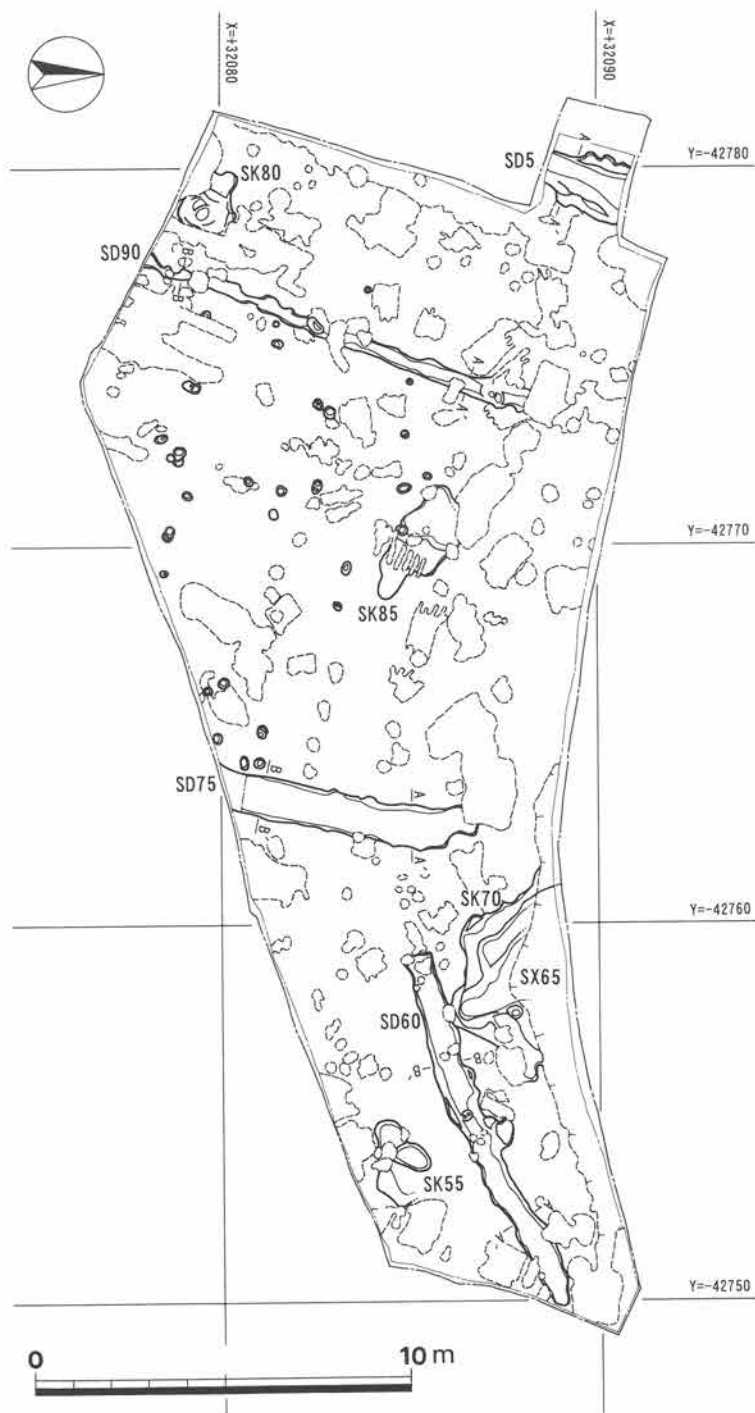


図8 東区平面図 (1/200)

～1.7m、深さ50～57cmを測る。底面には堆積物がなく、覆土は人為的埋土である。この溝については、維持管理が行き届いた状況であったものが、埋め戻されて溝としての機能を停止したものと思われる。出土遺物には、土師器、須恵器、古瓦、縄文土器、石器などの他、瓦器片なども出土しており、中世の所産と考えられる。

SD5 (図7・12、図版5-(4)) 中央区南東端および東区北西端で検出した南北溝である。現在の敷地境界線下を走るため、南端部と東端部について確認できたに過ぎない。この北・南両端部からは調査区外の谷方向へさらに延びる。溝の断面形状は緩やかなU字形を呈し、幅1.26～1.41mを測るが、深さは

気球写真およびスカイマスターで撮影し、カラーリバーサル6×6、モノクロ6×6、カラーリバーサル35mm、モノクロ35mm・6×7で記録した。

2. 遺構と遺物

現地表から遺構面までの深さは、西区で最も深く(南西端で約80cm)、台地上に当たる東区・中央区では0～60cmほどである。全体的には東側へ行くほど浅くなる。東区や中央区では、30～60cm程の厚さがある表土層を除去すると、地山(黄褐色シルト)面となる。西区では、台地端部を検出した北端部で、地山面が露出していたものの、谷へ行くにしたがって徐々に標高が下がる。谷部分では、約15cmある表土層を除去すると、40cm程の客土層、25cm程の近代の包含層を経て、青灰色シルトと砂礫が混入する層に達する。西区の遺構は、この面で検出している。また、この層の厚さは50cm程あり、下部は鉄分が沈着する。その下部は、拳大の礫を含む緑がかった褐色の砂層で、鉄分が沈着し、湧水も著しい。

a) 溝

SD1 (図7・12、図版5-(1)～(3))

中央区西端部で検出した南北溝である。北・南両端部とも調査区外の谷方向へ延びる。調査区内では、約20m分を検出した。断面形状は、逆台形を呈し、幅1.08

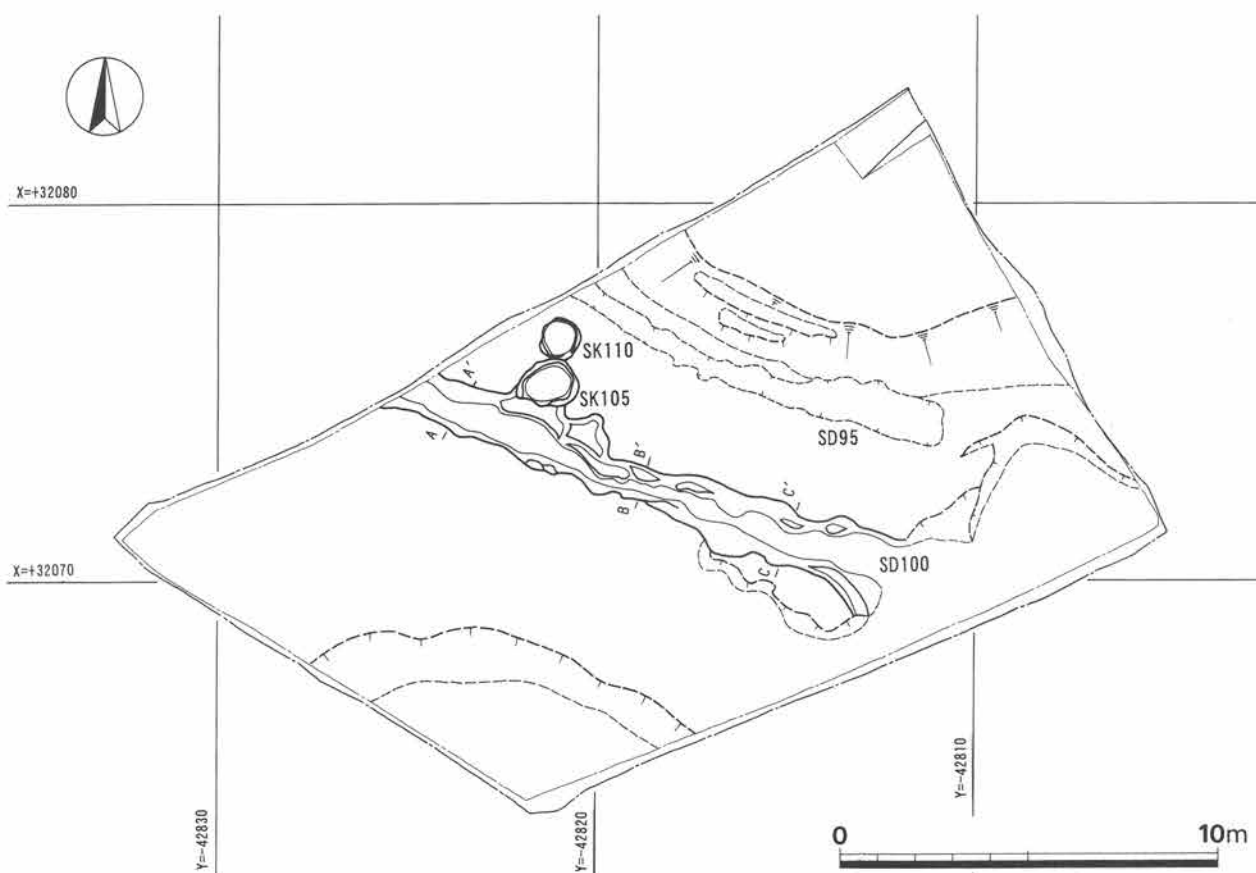


図9 西区平面図 (1/200)

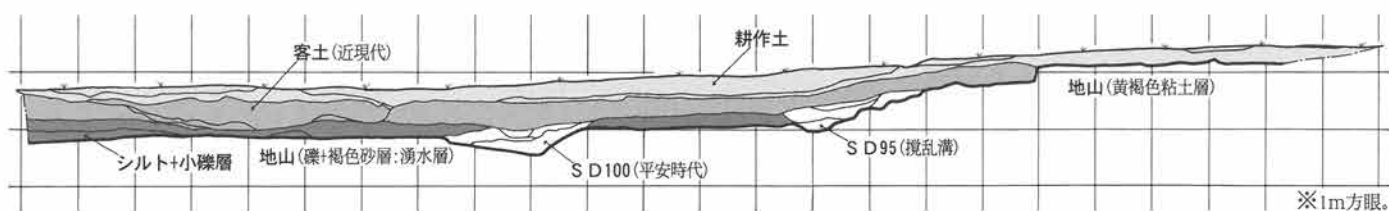


図10 西区西壁面土層図 (1/150)

13～16cmと浅い。覆土は茶灰色土一層で、自然堆積かと思われる。出土遺物としては、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、縄文土器、石器等がある。

SD60 (図7・12) 東区東端部で検出したやや蛇行する東西溝である。東端部は調査区外に延びる。調査区内では東西約10m分を検出した。断面形状は緩やかなU字形を呈し、幅0.6～0.74m、深さは10～14cmと浅い。出土遺物には、土師器のほか、縄文土器や石器などがある。

SD75 (図7・12) 東区中程やや東寄りで検出した南北溝である。北端部は調査区内で途切れるが、南端部は調査区外に延びる。調査区内では、約7m分を検出した。断面形状は、緩やかなU字形を呈し、規模は幅1.0～1.07m、深さ3～17cmと浅い。出土遺物には、土師器、須恵器の他、縄文土器、石器が見られる。

SD90 (図7・12) 東区西端で検出した南北溝である。北端部は地形的に下がるためか途切れるが、南端部は調査区外へ延びる。調査区内では、約10m分を検出した。断面形状は緩やかなU字形を呈し、幅

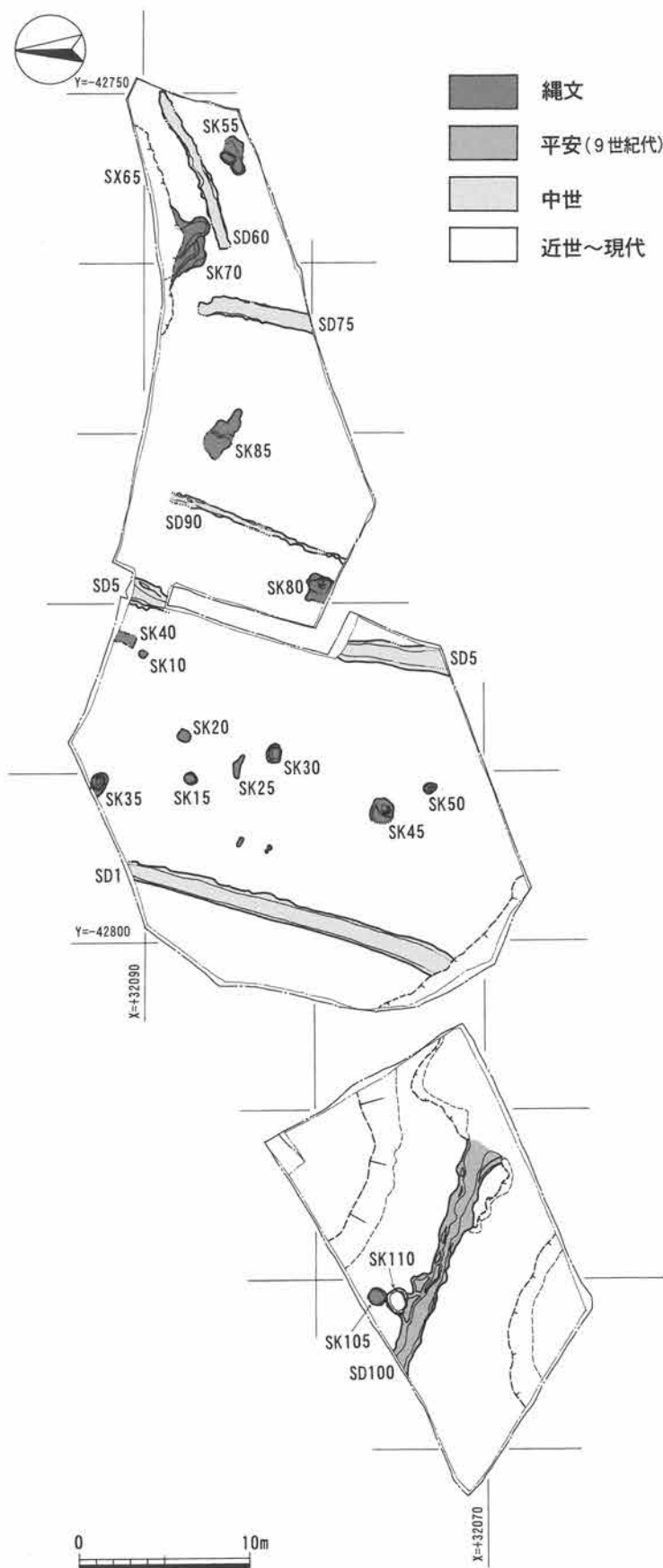


図11 主要遺構の分布 (1/400)

17～54cm、深さは3～14cmと浅い。出土遺物も少なく、土師器、縄文土器、石器などが少量ある。

SD100 (図7・12、図版5-(5)) 西区中央部で検出した東西溝である。調査区内では、約6m分を検出したが、西端部は調査区外へ延びる。断面形状は、U字形を呈し、幅0.75～1.7m、深さ13～37cmを測る。出土遺物は、土師器、瓦器、縄文土器、石器などである。

b) 土坑

SK10 中央区北東隅部で検出した円形プランで小形の土坑である。覆土は淡茶褐色土である。規模は、直径約55cm、深さ約10cmを測る。わずかに縄文土器の細片が2点出土している。

SK15 (図13、図版5-(6)(7)) 中央区北側で検出した。平面プランは、歪んだ円形を呈する。規模は、直径82～89cm、最大深36cmを測る。覆土は淡茶褐色土である。出土遺物には、縄文土器片71点、サヌカイト製石鏃2点、黒曜石片53点、サヌカイト片10点、叩き石1点がある。

SK20 中央区北側で検出した。平面プランは、隅丸方形に近い円形である。規模は、直径75～83cm、最大深7cmと浅く、断面形状は浅い皿状を成す。人為的に掘削されたものか、自然の窪みなのか判断が難しい。覆土は淡茶褐色土である。出土遺物には、縄文土器片19点、黒曜石片5点、炭化物などがある。

SK25 (図13) 中央区中程北寄りで検出した。細長くやや弧を描く平面形状である。規模は、長さ1.47m、幅0.53m、最大深18cmを測る。覆土は淡茶褐色土である。縄文土器細片が2点出土している。

SK30 (図13、図版6-(1)(2)) 中央

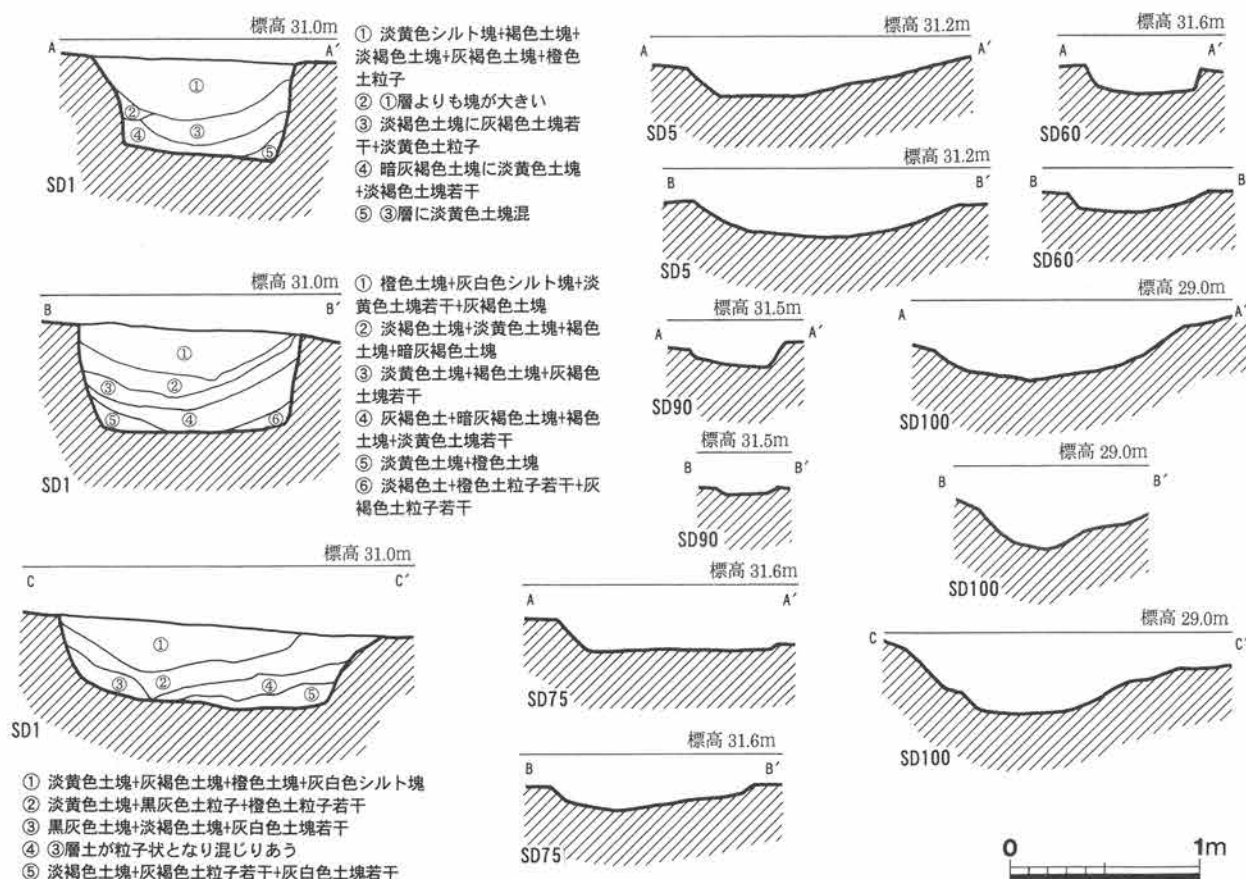


図12 溝土層及び断面図 (1/40)

区中央やや東寄りで検出した。平面プランは、隅丸方形に近いものの北辺と東辺がやや膨らみを持つ。その規模は、長さ1.17m、幅0.95m、最大深1.15mと他の土坑に比べて深い。覆土は淡茶褐色土である。出土遺物には、縄文土器片84点、黒曜石片53点、サヌカイト片18点、炭化物、焼土などがある。

S K 35 (図13、図版6-(3)) 中央区北壁中央付近で検出した。西側が調査区外に延びるものの、平面プランは楕円形になるものと思われ、立面的には二段掘りとなっている。規模は、長軸1.3m以上、短軸0.97m、最大深73cmである。覆土は淡茶褐色土である。出土遺物は、縄文土器片15点、黒曜石製スクレイパー1点、叩き石1点、黒曜石片11点、サヌカイト片2点、炭化物などがある。

S K 40 中央区北東隅部で検出した。北側が調査区外へ延びるだけでなく、現代に攪乱を受け非常に残りが悪い。このような状況ながらも、平面プランは隅丸長方形に近いものと思われる。その規模は、長さ1.2m以上、幅約70cm、深さ約3cmと浅い。覆土は淡茶褐色土である。出土遺物には、縄文土器片2点、サヌカイト片1点、炭化物がある。

S K 45 (図13、図版6-(4)) 中央区中央やや南寄りで検出した。現代家屋解体時の攪乱によって西側が破壊されているものの、歪んだ円形プランと考えてよいのではないだろうか。立面的には東側が深くなり二段掘りとなっている。規模は、径約1.6m、最大深72cmである。覆土は淡茶褐色土である。縄文土器片8点が出土した。

S K 50 (図版6-(5)) 中央区南側で検出した。平面プランは歪んだ円形で、立面形状は二段掘り状を呈する。規模は、径76cm、最大深18cmである。覆土は淡茶褐色土である。出土遺物には、縄文土器片2

点、サヌカイト片1点がある。

S K 55 東区東端部付近で検出した。現代の攪乱や削平を受け、土坑の壁の一部や底面の深い部分の窪みが残る程度である。このような理由で平面プランは不明だが、規模は、長さ約2.3m、幅約1.6m、深さ約30cmである。覆土は淡茶褐色土である。縄文土器片が2点出土した。

S K 70 東区東側で検出した落ち込み状の遺構である。調査区北側の谷に向かって傾斜し、上面には昭和期の落ち込み状遺構S X 65が広がる。平面プランは半円形に近く、現状での規模は、東西長約5m、南北長約2m、深さ約20cmで、覆土は淡茶褐色土である。出土遺物には、縄文土器片17点、サヌカイト片4点がある。

S K 80 (図13、図版6-(6)) 東区南西隅で検出した。家屋解体時の攪乱によって東西両側を破壊されており、平面プランの把握が困難である。立面的には、二段掘りの形状である。現状での規模は、東西長1.7m、南北長1.5m、最大深53cmである。覆土は淡茶褐色土である。出土遺物には、縄文土器片26点、黒曜石片1点、サヌカイト片2点、炭化物がある。

S K 85 東区中央西寄りで検出した。現代の家屋や解体時の攪乱により平面プランが歪になっている。規模は、長さ約2.4m、幅約1.6m、深さ約5cmである。覆土は淡茶褐色土である。出土遺物には、縄文土器片4点、サヌカイト片3点がある。

S K 105 (図13、図版6-(7)) 西区西壁中央付近で検出した、低台地の裾部(谷部)に掘り込まれた土坑で底面は砂層に達している。平面プランは楕円形で、断面形状からみると底面はフラットに近い。また、底面から湧水する。規模は、長軸1.6m、短軸1.3m、深さ53cmである。出土遺物には、縄文土器片の他、土師器、瓦器、古瓦、近世陶磁器などがある。切り合い関係から、S D 100、S K 110より後出する。

S K 110 (図13・図版6-(8)) 西区西壁中央付近で検出したS K 105と同様、低台地の裾部(谷部)に掘り込まれた土坑である。平面プランは円形で、土坑の底面は砂層に達し、フラットに近い。底面から湧水する。規模は、直径1.03~1.1m、深さ65cmを測る。出土遺物はない。切り合い関係から、S K 105に先行する。

c) その他の遺構

S X 65 東区東側で検出した落ち込み状の遺構である。対象地のすぐ北側は谷となっており、そちらへ向かい傾斜している。低台地の端に当たるのだろう。出土遺物は、縄文土器や石器などの他、土師器、須恵器、近世陶磁器に加えて昭和46年発行の10円硬貨が出土した。現代の所産である。なお、その下部には、S K 70が重複している。

d) 出土遺物

全体的に遺物はそれほど多くはない。主体となるのは、縄文時代の土器・石器である。中央区や東区の土坑からは、後期の土器(北久根山式・南福寺式・三万田式)が出土している。阿高式も出土するが、これらは中近世の遺構への混入品が多い。次に、平安時代と中近世の遺物が見られる。西区の溝S D 100からは、完形に近い9世紀代の土師器がまとまって出土している。また、中世の溝S D 1や近世の土坑S K 105へ混入した形で瓦が見られる。これは凸面に縄目文や斜格子文の叩き目を持つもので、筑後国分寺跡出土品と類似するものである。中央区の溝S D 1・5からは、回転糸切り底の土師器や東播系捏ね鉢、龍泉窯系青磁碗の細片など中世の遺物が出土している。個々については、遺物一覧表を参照されたい。

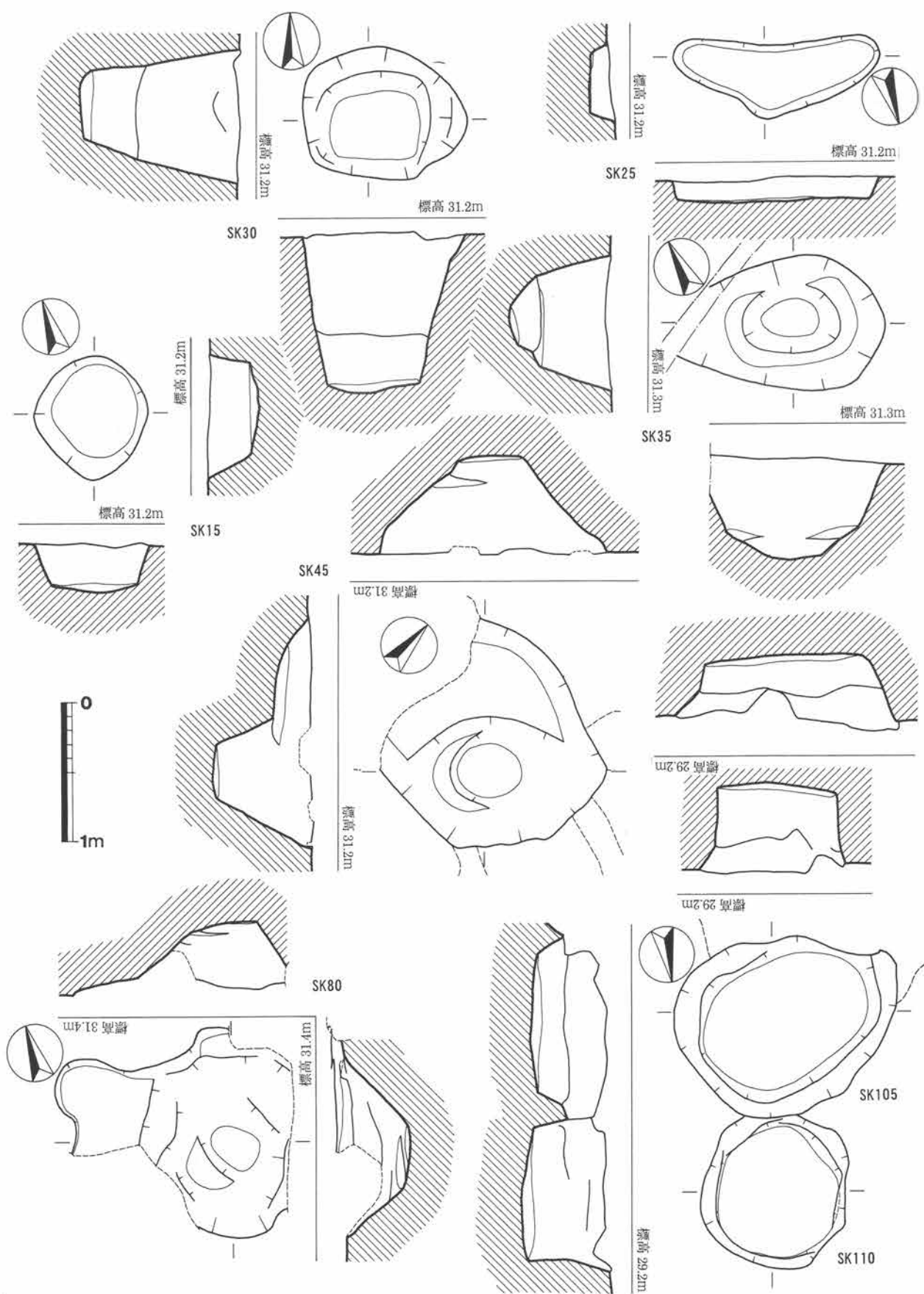


図13 土坑平面・断面図 (1/40)

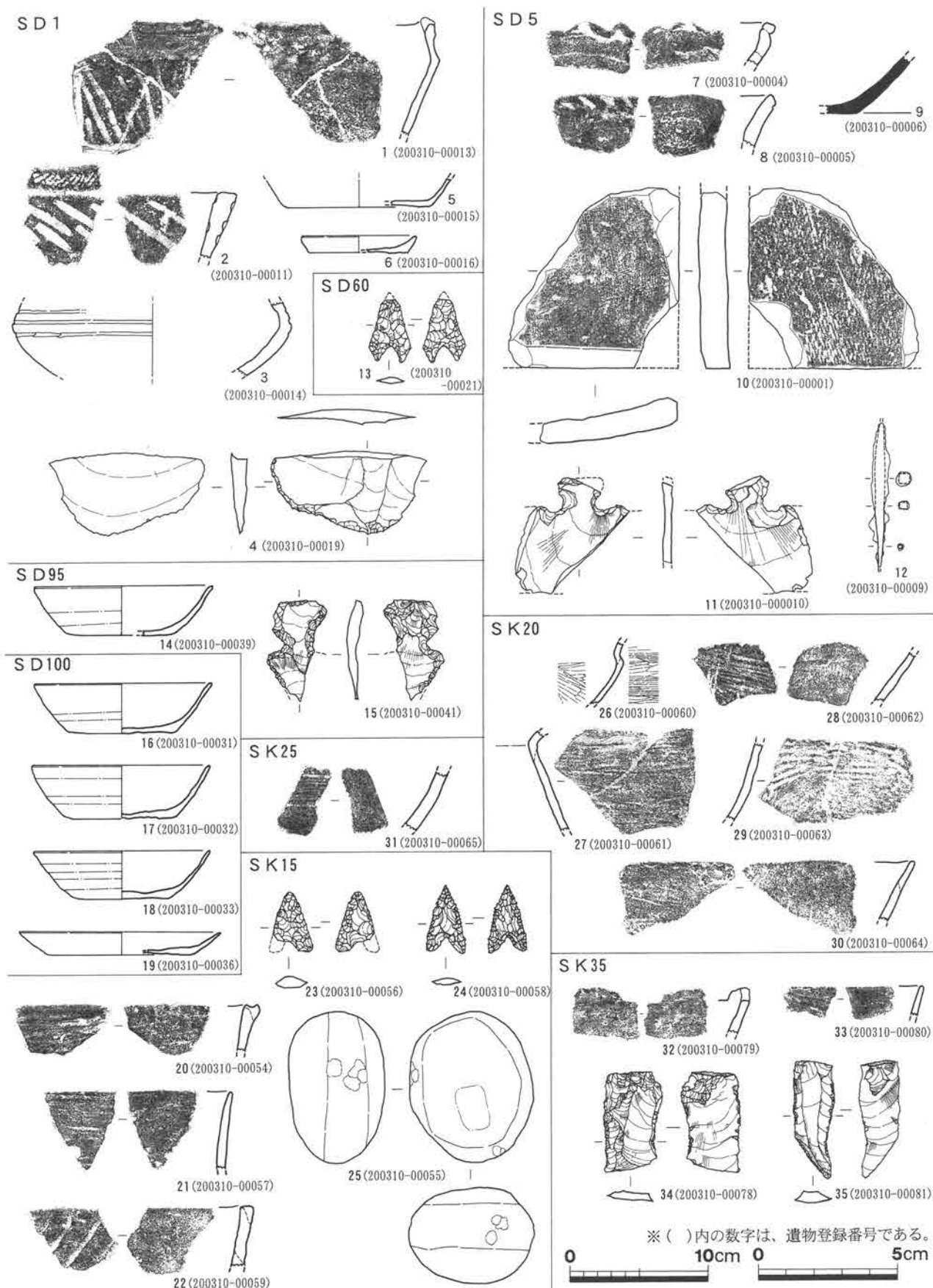


図14 出土遺物実測図① (1/4、ただし 4・11・13・15・23・24・34・35は1/2)

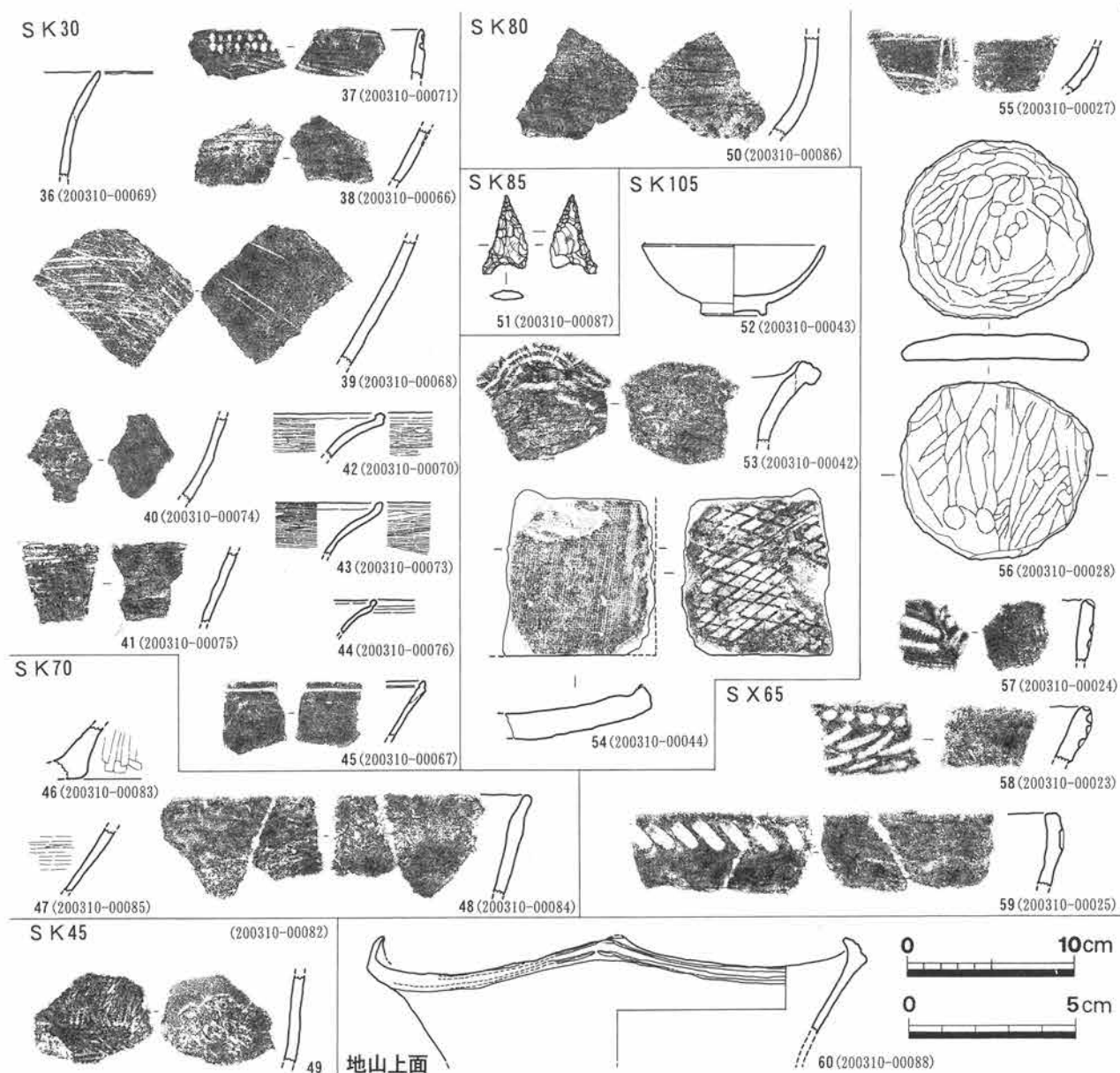


図15 出土遺物実測図② (1/4、ただし51のみ1/2)

□遺物実測図凡例

1. 縮尺 図面縮尺は、1/4を基本とし、石器など小形のものは、1/2とした。
2. 種別 断面網掛けは瓦器を、黒塗りは須恵器及び須恵質土器、内面・外面の網掛けは黒色土器を示す。
3. 調整 一点破線 ----- はヨコナデと回転ナデを、破線 は、ケズリを表す。また、フリーハンドの一点破線は、釉の範囲を表す。

■遺物観察表凡例

1. 「法量」の単位はcmであり、() 内の数値は現存値である。
2. 「色調」は、小山正忠・竹原秀雄 1999『新版標準土色帖』21版、日本色研事業株式会社、に基づいた上で、土色名のみ記した。
3. 陶磁器の「色調」は釉色を表す。
4. 「胎土」では、0.5mm未満の砂粒を微砂粒、1mm未満を細砂粒、2mm未満を砂粒と表記した。それ以上大きい粒子が混入する場合、'○mm程の砂' と記した。
5. 登録番号は、本市教委で定めている出土遺物の登録番号である。
すなわち、'調査番号(6桁)－遺物登録番号(5桁)' の組み合わせである。 (例) 200310-00001

表3 第4次調査出土遺物観察表(1)

遺物 No	出土 遺構	種 別	器形	残存 状況	法量 (cm)			色 調		調 整			胎 土 (材質)	焼 成	備 考	登録 番号
					口径 [長]	底径 [幅]	器高 [厚]	外面	内面	外面 (凸面)	内面 (凹面)	底部 (破断面)				
1 図14	SD 1	縄文土器	深鉢	口縁部片	—	—	(8.8)						にぶい赤褐	暗赤褐	ナデ 凹線文	ナデ
2 図14	SD 1	縄文土器	深鉢	口縁部片	—	—	(4.8)	橙	にぶい橙	短斜 凹線文	短斜 凹線文	—	礫多量、石英、 若干の雲母	良		200310 -00011
3 図14	SD 1	縄文土器	深鉢	胴部片	—	—	(5.4)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコミガキ	ヨコミガキ	—	礫多量、石英、 若干の角閃石	良		200310 -00014
4 図14	SD 1	石器	スクレイ パー	完形	[5.6]	[3.0]	[0.6]	灰	—	—	—	—	サヌカイト	—	重量9.9g	200310 -00019
5 図14	SD 1	土師器	坏	底部片	—	10.0	(2.0)	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	精良、若干の 赤色粒子	良		200310 -00015
6 図14	SD 1	土師器	小皿	破片1/4	8.2	7.0	1.3	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り、 板目	精良、雲母	良	見込みに煤付着	200310 -00016
7 図14	SD 5	縄文土器	深鉢	口縁部片	—	—	(3.1)	にぶい赤褐	橙	ナデ オサエ	ナデ オサエ	—	礫多量、多量の 石英、若干 の角閃石	良		200310 -00004
8 図14	SD 5	縄文土器	深鉢	口縁部片	—	—	(3.8)	灰黄褐	にぶい褐	ヨコナデ	ミガキ	—	砂粒多量、雲母、 若干の角閃石	良		200310 -00005
9 図14	SD 5	須恵質 土器	捏ね鉢	底部片	—	—	(4.1)	灰	灰	回転ナデ	回転ナデ ナデ	未調整	砂粒若干、若 干の黒色粒子	良	東播系	200310 -00006
10 図14	SD 5	瓦	平瓦	端部片	[13.0]	[12.2]	[2.0]	橙	橙	縦位縄目 文タタキ	布目	ヘラケズリ	砂粒若干、赤 色粒子	良		200310 -00001
11 図14	SD 5	石器	石匙	基部片	[4.2]	[4.1]	[0.1~ 0.5]	灰	—	—	—	—	サヌカイト	—	横型	200310 -00010
12 図14	SD 5	鉄器	不明	両端部欠	[10.4]	[0.2~ 0.7]	[0.3~ 0.8]	明黄褐	—	—	—	—	鉄	—	錆が著しい	200310 -00009
13 図14	SD60	石器	石鐮	先端部欠	[2.3]	[1.55]	[0.25]	灰	—	—	—	—	黒曜石 (姫島産)	—	重量0.9g	200310 -00021
14 図14	SD95	土師器	坏	3/4	12.9	7.9	3.7	浅黄	浅黄	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	精良、雲母粉、 若干の赤色粒 子	良		200310 -00039
15 図14	SD95	石器	石匙	基部片	[3.7]	[2.2]	[0.5]	黒	—	—	—	—	黒曜石	—	縦型	200310 -00041
16 図14	SD100	土師器	坏	口縁部 1/4	12.8	7.7	3.7	浅黄	浅黄	回転ナデ	回転ナデ ヨコナデ	ヘラ切り 板目	精良	良		200310 -00031
17 図14	SD100	土師器	坏	1/2	12.9	7.6	3.9	浅黄	浅黄	回転ナデ	回転ナデ ヨコナデ	ヘラ切り 板目	精良、雲母粉	良		200310 -00032
18 図14	SD100	土師器	坏	2/3	12.8	6.9	3.5	浅黄	浅黄	回転ナデ	回転ナデ ヨコナデ	ヘラ切り 板目	精良、雲母粉	良		200310 -00033
19 図14	SD100	土師器	皿	5/6	14.5	10.1	1.8	浅黄	浅黄	回転ナデ	回転ナデ ヨコナデ	ヘラ切り	精良、雲母粉	良		200310 -00036
20 図14	SK15	縄文土器	深鉢	口縁部片	—	—	(3.4)	橙	明黄褐	ヨコナデ	ヨコナデ	—	礫多量、角閃 石、若干の雲 母	良		200310 -00054
21 図14	SK15	縄文土器	深鉢	口縁部片	—	—	(5.6)	にぶい橙	にぶい黄橙	条痕	条痕	—	砂粒多量、雲 母粉	良		200310 -00057
22 図14	SK15	縄文土器	深鉢	口縁部片	—	—	(4.4)	にぶい褐	明赤褐	ナデ	ナデ	—	礫多量、石英、 雲母粉	良		200310 -00059
23 図14	SK15	石器	石鐮	基部欠損	[2.2]	[1.45]	[0.45]	灰白	—	—	—	—	サヌカイト	—	重量1.0g	200310 -00056
24 図14	SK15	石器	石鐮	完形	[2.5]	[1.4]	[0.3]	灰	—	—	—	—	サヌカイト	—	重量0.7g	200310 -00058
25 図14	SK15	石器	敷・磨石	完形	[10.9]	[9.0]	[6.95]	灰白	—	—	—	—	安山岩	—		200310 -00055
26 図14	SK20	縄文土器	浅鉢	胴部片	—	—	(4.5)	にぶい黄橙	黄灰	ヨコミガキ	ミガキ ナデ	—	精良、細砂粒 若干	良		200310 -00060
27 図14	SK20	縄文土器	深鉢	胴部片	—	—	(7.3)	橙	浅黄橙	ナデ 条痕	ナデ	—	細砂粒多量、 多量の角閃石	良		200310 -00061
28 図14	SK20	縄文土器	深鉢	胴部片	—	—	(3.5)	橙	にぶい黄橙	条痕	ナデ	—	細砂粒多量、 雲母粉	良		200310 -00062
29 図14	SK20	縄文土器	深鉢	胴部片	—	—	(5.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	沈線文	ナデ	—	細砂粒多量、 石英、若干の 雲母粉	良		200310 -00063
30 図14	SK20	縄文土器	深鉢	胴部片	—	—	(4.3)	にぶい褐	にぶい黄橙	ナデ 条痕	ナデ	—	礫多量、多量 の角閃石	良		200310 -00064

表4 第4次調査出土遺物観察表(2)

遺物 No.	出土 遺構	種 別	器形	残存 状況	法 量 (cm)			色 調		調 整			胎 土 (材質)	焼 成	備 考	登録 番号
					口径 [長]	底径 [幅]	器高 [厚]	外面	内面	外面 (凸面)	内面 (凹面)	底部 (破断面)				
31 図14	SK25	縄文土器	深鉢	胴部片	—	—	(5.5)	にぶい赤褐	にぶい橙	条痕 ナデ	ナデ	—	礫多量	良		200310 -00065
32 図14	SK35	縄文土器	深鉢	口縁部片	—	—	(3.4)	にぶい褐	にぶい赤褐	オサエ ナデ	ナデ	—	細砂粒多量、 石英	良		200310 -00079
33 図14	SK35	縄文土器	深鉢	口縁部片	—	—	(2.2)	にぶい褐	橙	条痕	ナデ	—	礫多量、雲母粉	良		200310 -00080
34 図14	SK35	石器	スクレイ パー	ほぼ完形	[3.6]	[2.1]	[0.6]	黒	—	—	—	—	黒曜石	—	重量4.5 g	200310 -00078
35 図14	SK35	石器	スクレイ パー	完形	[4.25]	[1.5]	[0.5]	黒	—	—	—	—	黒曜石	—	重量2.8 g	200310 -00081
36 図15	SK30	縄文土器	深鉢	口縁部片	—	—	(6.3)	明赤褐	にぶい黄橙	オサエ ナデ	オサエ ナデ	—	礫多量、雲母粉 石英、角閃石	良		200310 -00069
37 図15	SK30	縄文土器	深鉢	口縁部片	—	—	(3.0)	灰褐	にぶい黄橙	刺突文 条痕	条痕	—	砂粒、多量の 金雲母、若干 の角閃石	良		200310 -00071
38 図15	SK30	縄文土器	深鉢	胴部片	—	—	(3.3)	にぶい 黄橙	にぶい橙	条痕	ヨコナデ	—	細砂粒多量、 多量の角閃石	良		200310 -00066
39 図15	SK30	縄文土器	深鉢	胴部片	—	—	(7.5)	にぶい橙	にぶい橙	条痕	ミガキ	—	細砂粒、石英	良		200310 -00068
40 図15	SK30	縄文土器	深鉢	胴部片	—	—	(5.1)	にぶい黄橙	褐灰	ナデ	ナデ	—	細砂粒、石英、 金雲母	良		200310 -00074
41 図15	SK30	縄文土器	深鉢	胴部片	—	—	(4.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	条痕 ナデ	ナデ	—	砂粒、石英、 若干の角閃石	良		200310 -00075
42 図15	SK30	縄文土器	浅鉢	口縁部片	—	—	(2.8)	黒褐	黄灰	ヨコミガキ	ヨコミガキ	—	精良、若干の 細砂粒	良		200310 -00070
43 図15	SK30	縄文土器	浅鉢	口縁部片	—	—	(3.2)	灰黄褐	黄灰	ヨコミガキ	ヨコミガキ	—	精良、細砂粒 若干、石英	良		200310 -00073
44 図15	SK30	縄文土器	浅鉢	口縁部片	—	—	(2.1)	橙	橙	不明	不明	—	精良、角閃石	良	ローリング受ける	200310 -00076
45 図15	SK30	縄文土器	浅鉢	口縁部片	—	—	(3.3)	灰黄褐	褐灰	ヨコミガキ	ヨコミガキ	—	精良、角閃石	良		200310 -00067
46 図15	SK70	縄文土器	深鉢	底部片	—	—	(3.2)	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ オサエ	ナデ	—	細砂粒	良		200310 -00083
47 図15	SK70	縄文土器	浅鉢	胴部片	—	—	(3.8)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデかミ ガキ	ヨコミガキ	—	精良	良		200310 -00085
48 図15	SK70	縄文土器	深鉢	口縁部片	—	—	(6.0)	にぶい橙	にぶい橙	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	—	礫多量、石英、 雲母	良		200310 -00084
49 図15	SK45	縄文土器	深鉢	胴部片	—	—	(5.2)	橙	褐灰	条痕	ナデ	—	細砂粒、多量 の角閃石	良	内面に焦げ付着	200310 -00082
50 図15	SK80	縄文土器	深鉢	胴部片	—	—	(6.0)	灰褐	にぶい褐	ヨコナデ	条痕 オサエ	—	多量の滑石粉末	良		200310 -00086
51 図15	SK85	石器	石鏃	基部欠損	[2.4]	[1.35]	[0.35]	灰	—	—	—	—	サヌカイト	—		200310 -00087
52 図15	SK105	陶器	椀	1/4	11.0	高台 径4.0	4.3	浅黄	—	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ ケズリ	精良	良	外底部露胎	200310 -00043
53 図15	SK105	縄文土器	深鉢	口縁部片	—	—	(4.9)	灰黄褐	黄灰	沈線文 ミガキ	ナデ ミガキ	—	細砂粒、若干 の角閃石	良		200310 -00042
54 図15	SK105	瓦	平瓦	端部片	—	—	[1.6]	灰白	灰白	斜格子文 叩き	布目	未調整	ほぼ精良、礫 若干、雲母粉	良	円筒桶巻き	200310 -00044
55 図15	SX65	縄文土器	鉢	胴部片	—	—	(2.8)	灰	褐灰	ミガキ 沈線文	ミガキか ナデ	—	礫、角閃石	良		200310 -00027
56 図15	SX65	縄文土器	円盤	ほぼ完形	径5.7 ~6.1	—	1.6	明赤褐	にぶい橙	オサエ ミガキ	オサエ ミガキ	—	礫多量	良	阿高式深鉢底部 を打ち欠き転用	200310 -00028
57 図15	SX65	縄文土器	深鉢	口縁部片	—	—	(3.7)	赤	にぶい赤褐	短斜凹線文	ナデ	—	礫多量、多量 の滑石粉末	良		200310 -00024
58 図15	SX65	縄文土器	深鉢	口縁部片	—	—	(3.25)	橙	橙	短斜凹線文、 凹点文	ナデ	—	礫多量、石英、 雲母	良		200310 -00023
59 図15	SX65	縄文土器	深鉢	口縁部片	—	—	(4.5)	ナデ、短 斜凹線文	ナデ オサエ	灰褐	にぶい褐	—	礫多量、 石英多量	良		200310 -00025
60 図15	地山上面	縄文土器	深鉢	口縁部 1/2	29.9	—	(7.6)	にぶい褐	にぶい黄橙	不明	不明	—	礫多量、 若干の角閃石	良	ローリング受ける。 SD100北斜面地山 出土。	200310 -00088

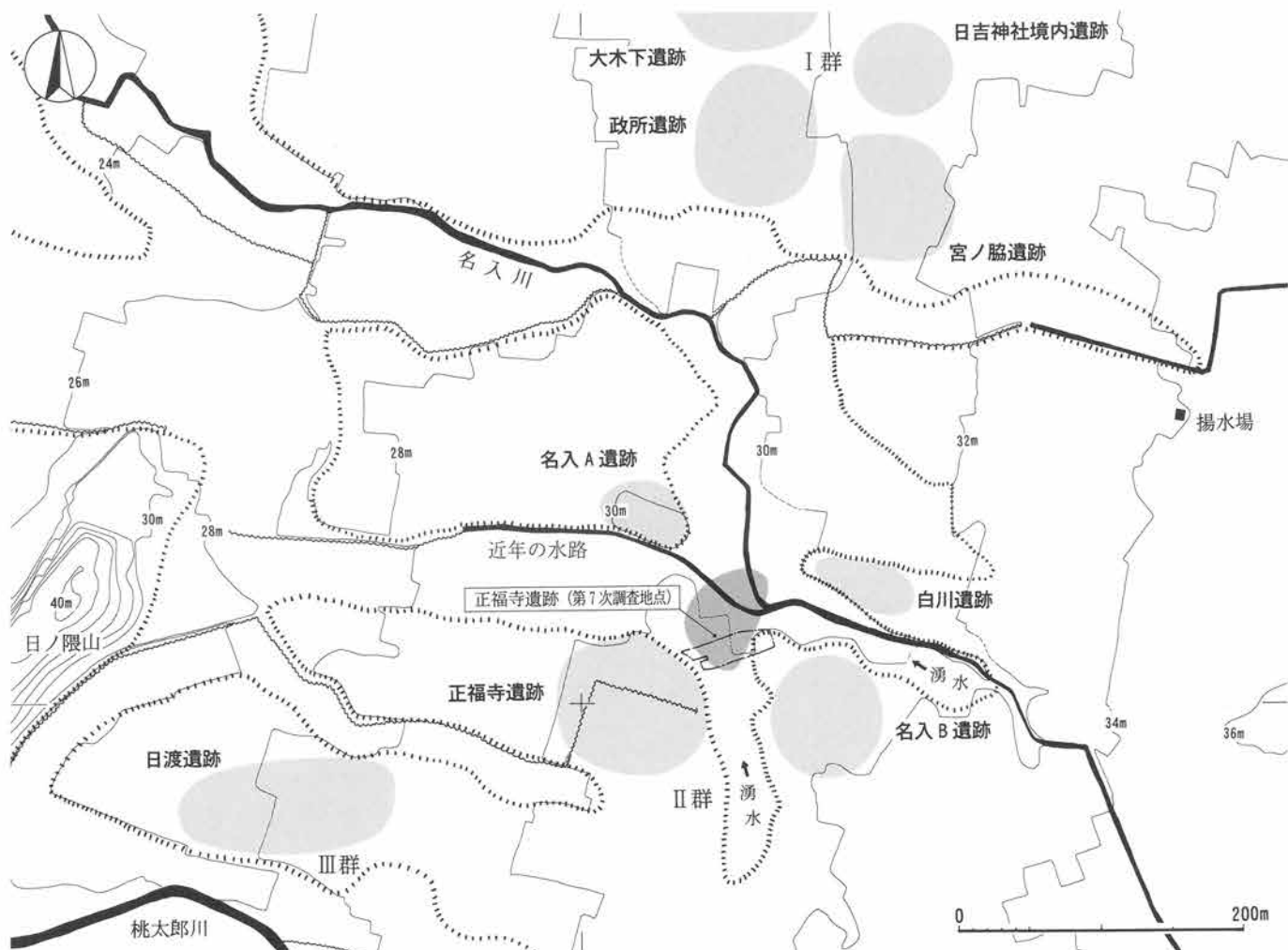


図16 日渡遺跡群の周辺地形と縄文遺跡の分布 (1/5,000)

3. まとめ

図16は、1/2,500国土基本図を元に、字図、昭和29年米軍撮影空中写真等から復元した白川遺跡周辺の地形図である。これによると、付近一帯は豊富な湧水と河川の開折により、複雑に谷が入り組んだ地形であることがわかる。縄文遺跡は北から、I群：名入川（金丸川）北岸、II群：名入川（金丸川）上流域、III群：桃太郎川北岸、の3つのまとまりが見られる。I群（大木下・日吉神社境内・宮ノ脇・政所遺跡）は低台地も広く地形的に安定しており、前・後・晩期の遺物が広く散布する。III群（日渡遺跡）は中・後期の採集遺物に加えて、近年早・後期の遺物包含層が調査された（表2のd）。

さて、II群（白川・正福寺・名入A・名入B遺跡）は本遺跡を含む一群であるが、これまでも後期を中心に中～晩期の遺物が出土または採集されている（表2のa等参照）。ここは、東流してきた名入川が北へ流れを変える地点にあたり、後期には谷に面する低台地上に、白川遺跡をはじめ4遺跡が分布する。この4遺跡が取り囲む谷の中心部には、多数のドングリピットや貯木施設などを出土した正福寺遺跡（第7次調査・表2のe参照）が位置する。ここは、東と南に近接する谷頭からの湧水が合流する水量の豊富な場所であり、位置的に見てもII群の重要な生産・加工・貯蔵の拠点としての役割を果たしたものと思われる。

このようにII群は、生産活動の拠点としての谷を中心に、その周囲の台地上に生活域が取り巻く同心円構造を呈している。以上から、白川遺跡はII群の一角を構成する生活域であったものと思われる。

図 版



(1) 第3次調査区全景 (北から)



(2) SK 1 全景 (西から)



(3) SK 2 全景 (北から)

図版 2



(1) SK 3 全景 (南から)



(2) ST 4 全景 (北から)



(3) ST 5 遺物出土状況 (西から)



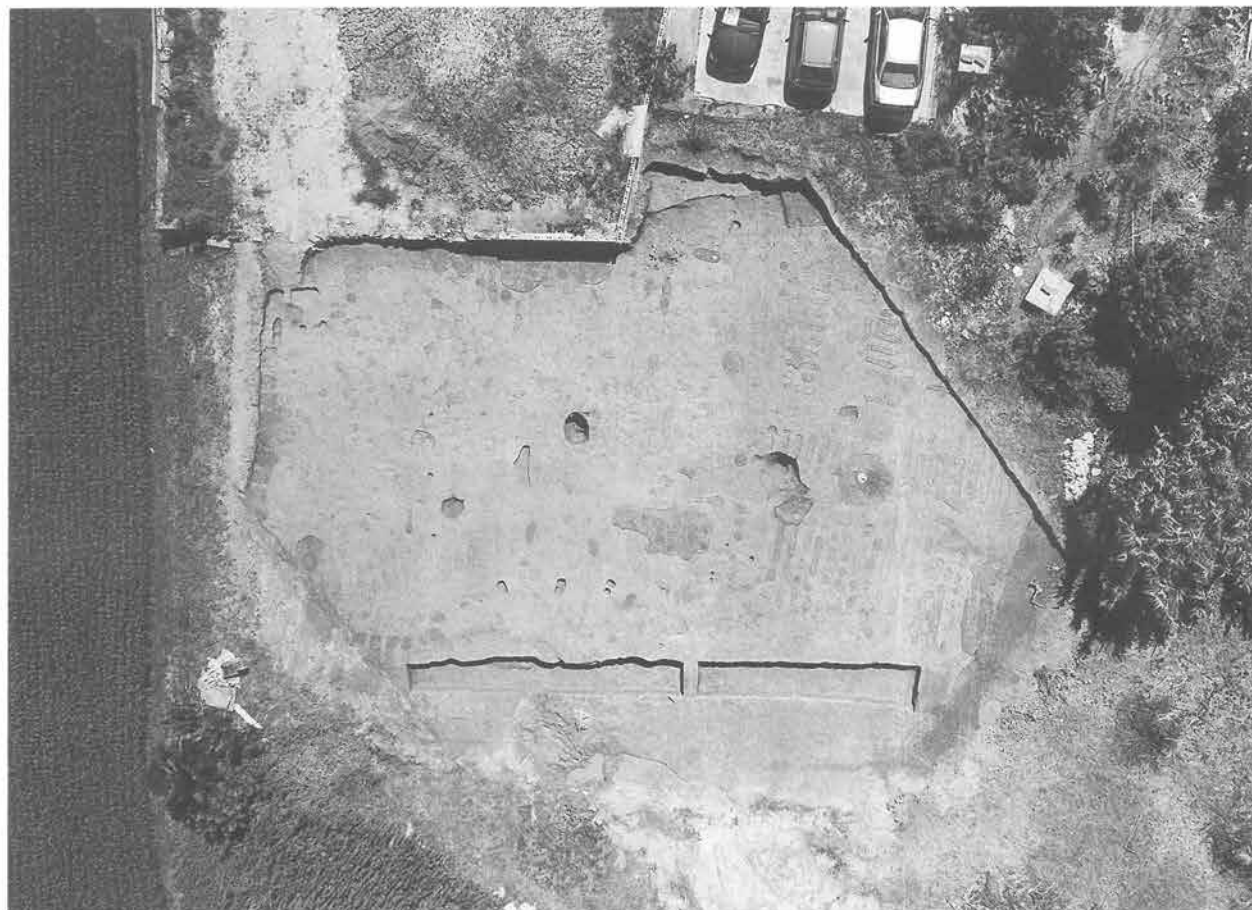
(4) SD 6 全景 (西から)



(5) SK 1 出土土器



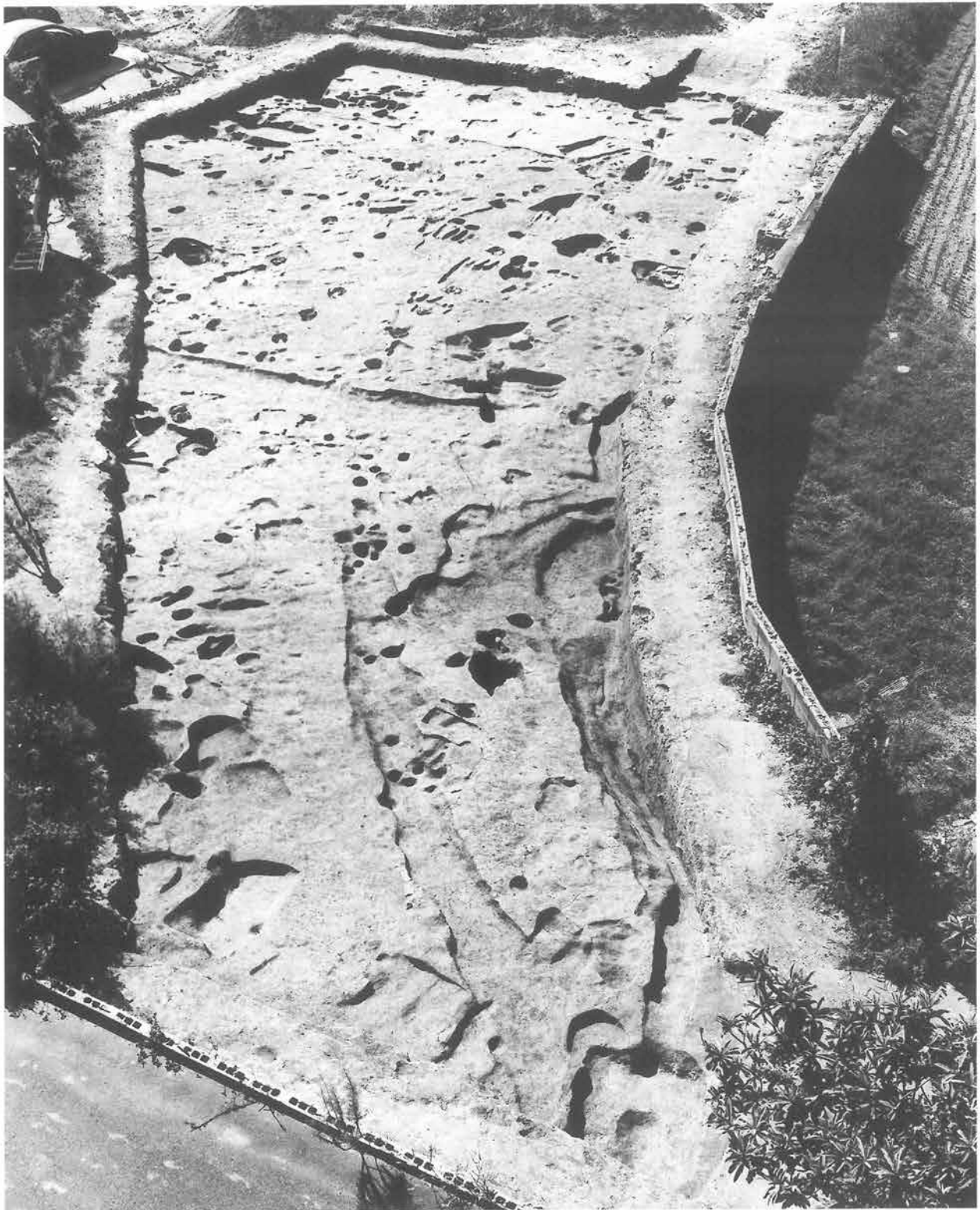
(6) ST 5、谷部埋土出土土器



(1) 第4次調査区中央区全景 (西から)



(2) 西区全景 (東から)



東区全景（東から）



(1) S D 1 全景 (北から)



(4) S D 5 全景 (北から)



(2) S D 1 C - C ' (北から)



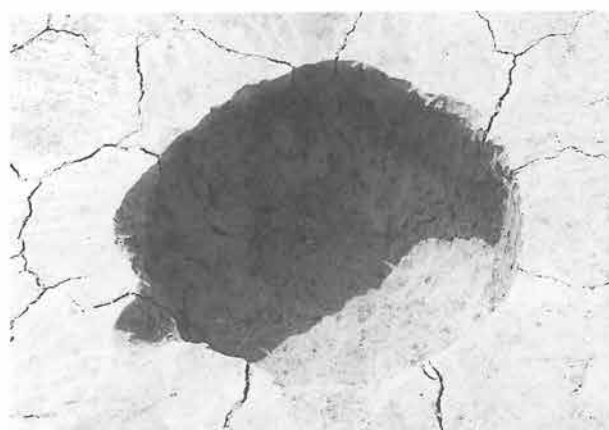
(5) S D 100 全景 (西から)



(3) S D 1 B - B ' (北から)



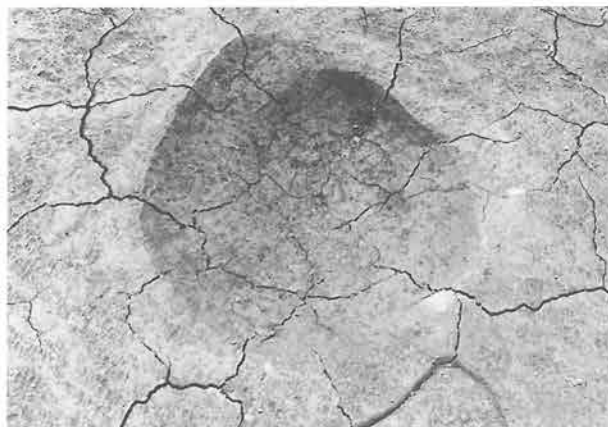
(6) S K 15 遺物出土状況 (北から)



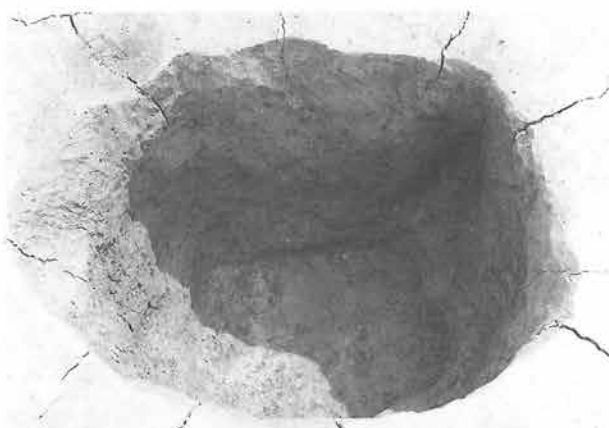
(7) S K 15 完掘状況 (西から)



(1) S K 30遺物出土状況 (南から)



(5) S K 50完掘状況 (北から)



(2) S K 30完掘状況 (南から)



(6) S K 80遺物出土状況 (南から)



(3) S K 35完掘状況 (北から)



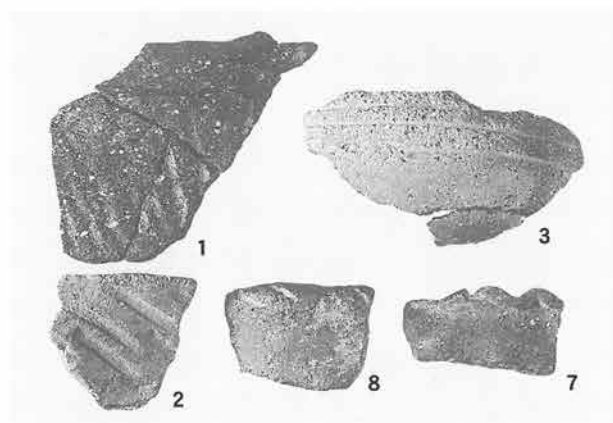
(7) S K 105完掘状況 (西から)



(4) S K 45完掘状況 (北から)



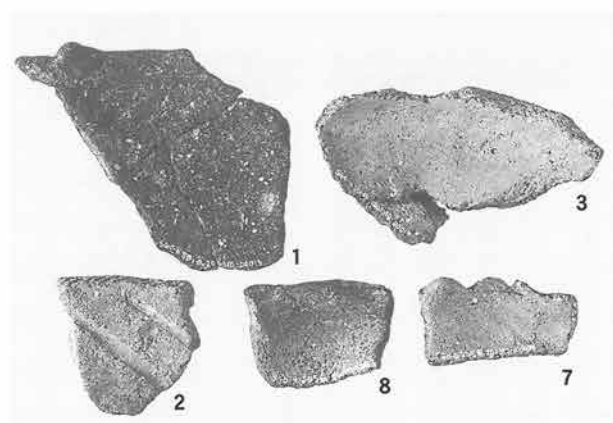
(8) S K 110完掘状況 (西から)



(1) S D 1・5 出土縄文土器 (表)



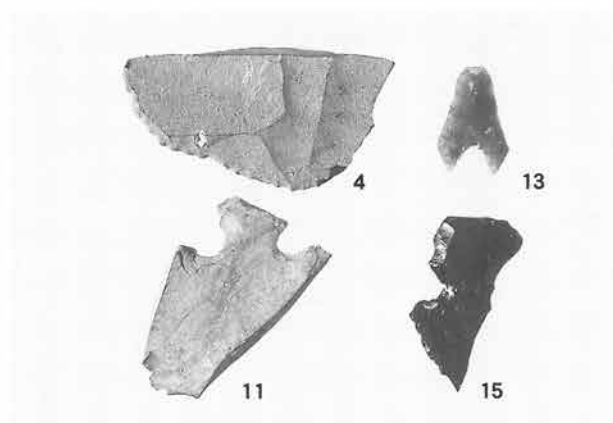
(5) S D 1 出土土師器



(2) S D 1・5 出土縄文土器 (裏)



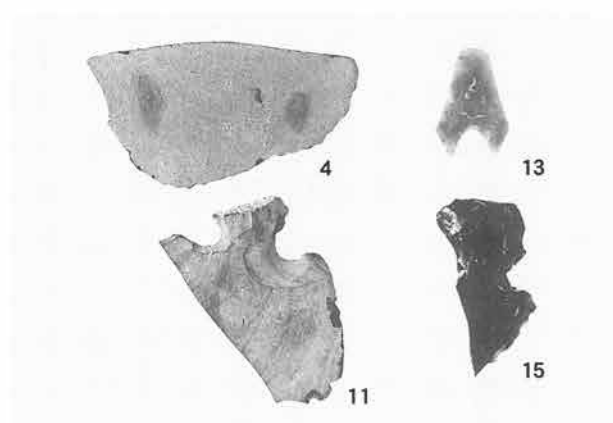
(6) S D 100 出土土師器



(3) S D 1・5・60・95 出土石器 (表)



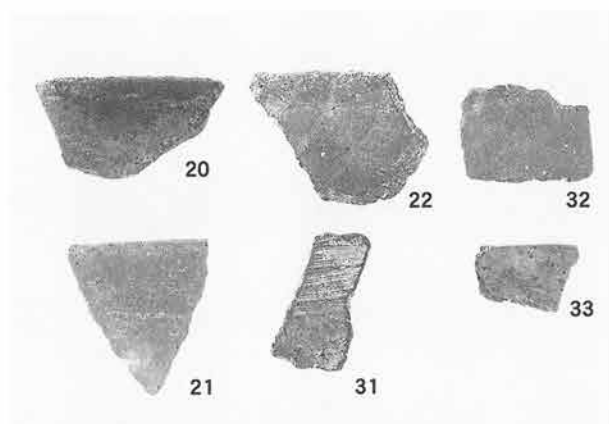
(7) S D 100 出土土師器



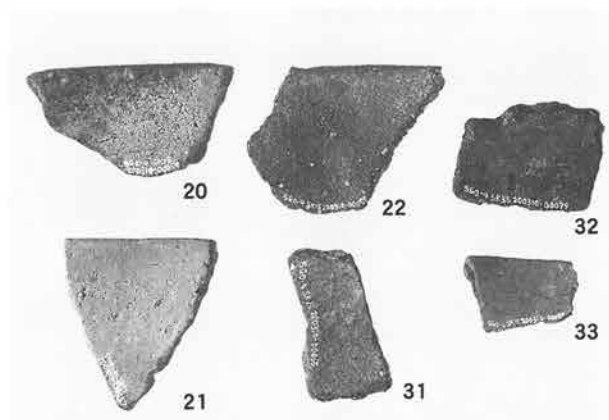
(4) S D 1・5・60・95 出土石器 (裏)



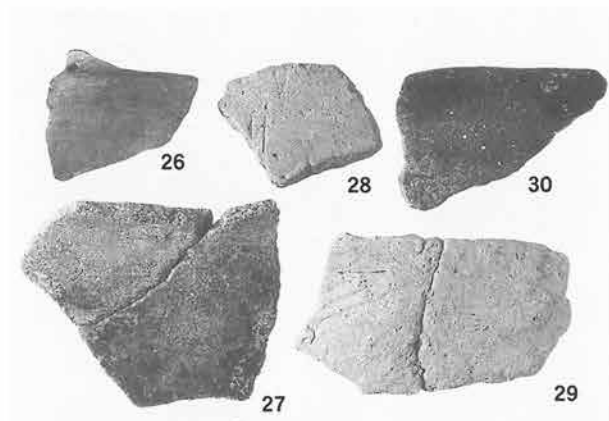
(8) S D 100 出土土師器



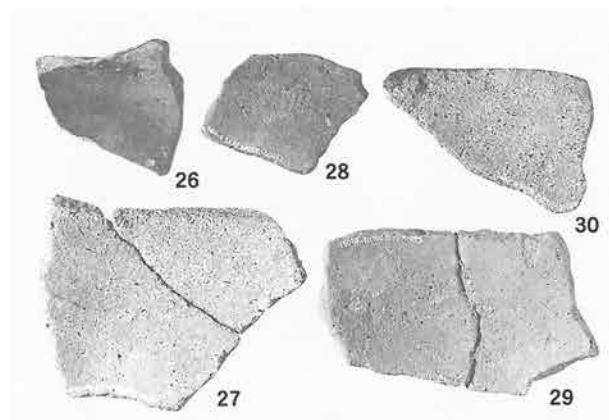
(1) S K 15 · 25 · 35出土縄文土器 (表)



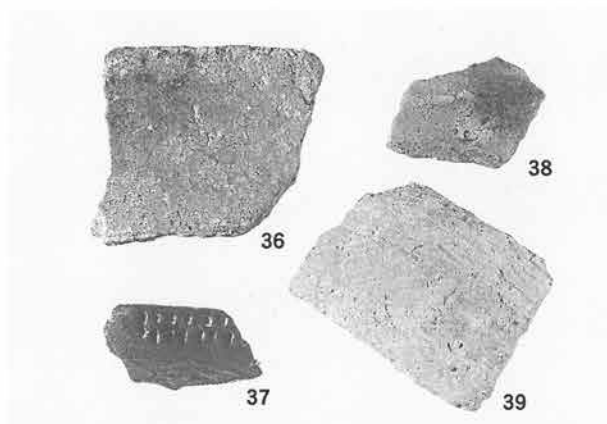
(2) S K 15 · 25 · 35出土縄文土器 (裏)



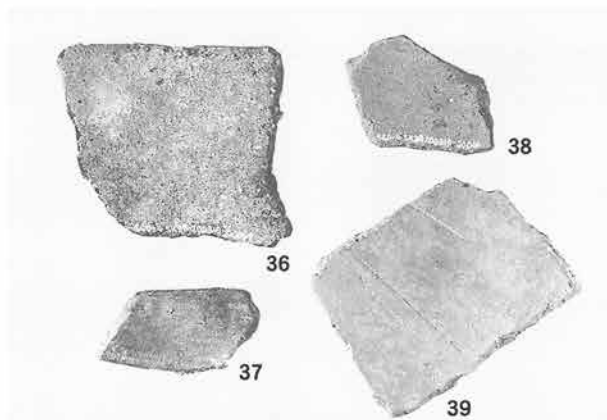
(3) S K 20出土縄文土器 (表)



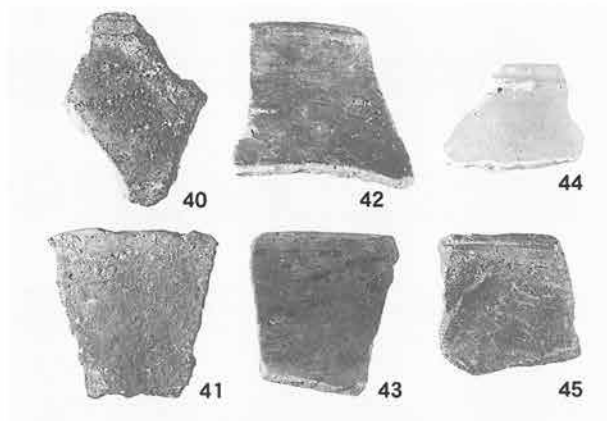
(4) S K 20出土縄文土器 (裏)



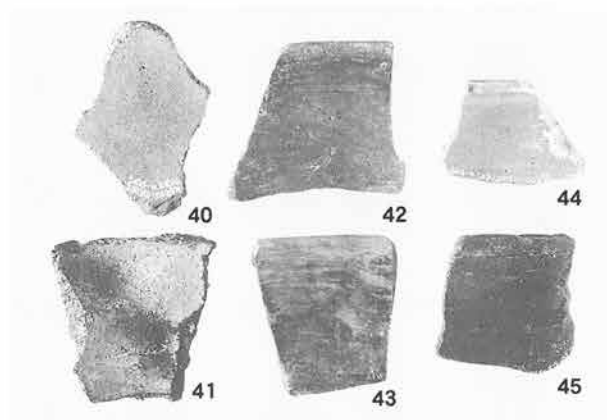
(5) S K 30出土縄文土器① (表)



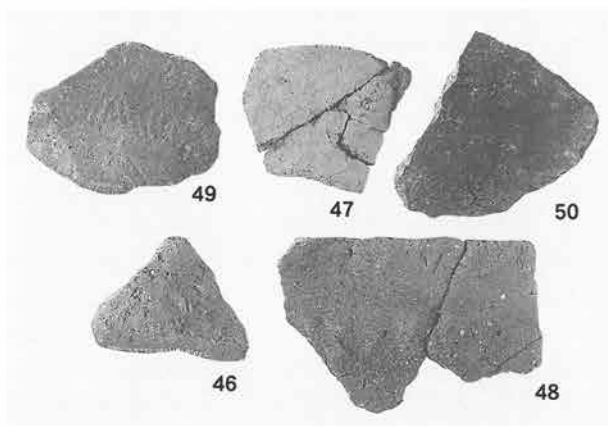
(6) S K 30出土縄文土器① (裏)



(7) S K 30出土縄文土器② (表)



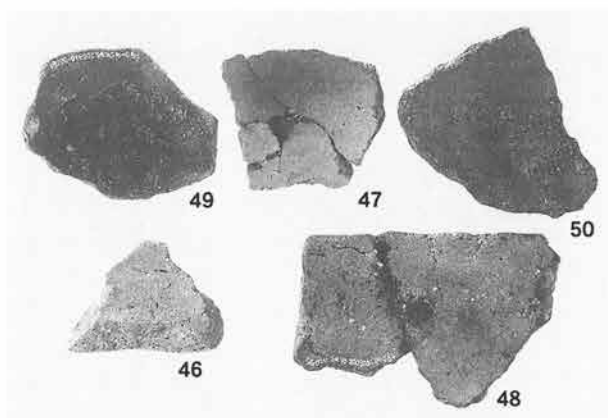
(8) S K 30出土縄文土器② (裏)



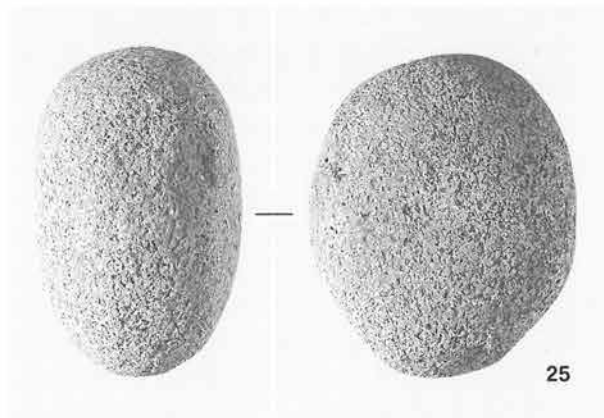
(1) S K45・70・80出土縄文土器 (表)



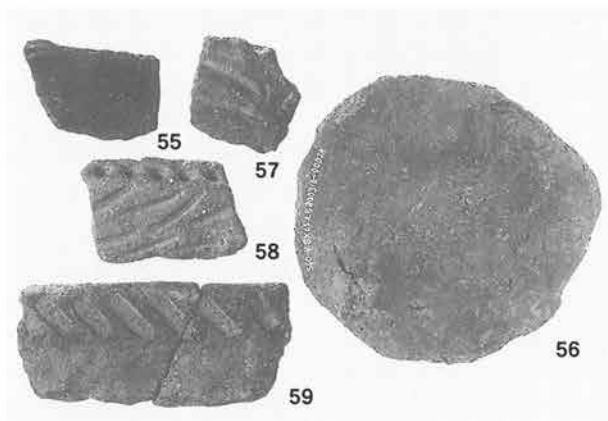
(5) 地山上面出土縄文土器



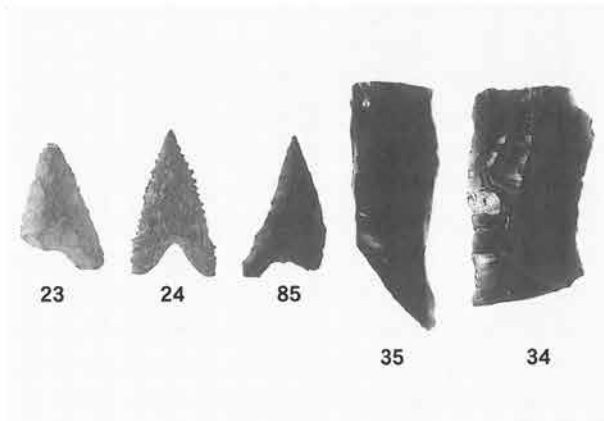
(2) S K45・70・80出土縄文土器 (裏)



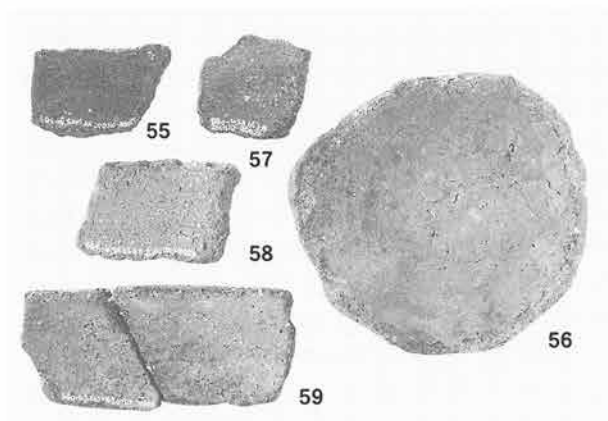
(6) S K15出土石器



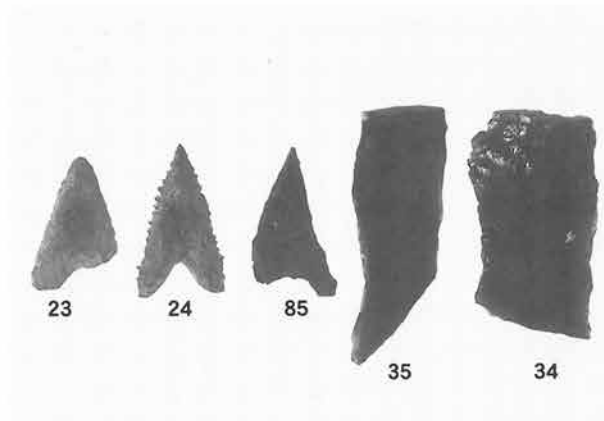
(3) S X65出土縄文土器 (表)



(7) S K15・35・85出土石器 (表)



(4) S X65出土縄文土器 (裏)



(8) S K15・35・85出土石器 (裏)



第4次調査地上空から西方を望む

報告書抄録

ふりがな	ひわたしいせきぐん しらごういせき
書名	日渡遺跡群Ⅳ－白川遺跡第3・4次調査－
副書名	街路事業『都市計画道路3・3・6号東合川野伏間線』に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書 第224集
編著者名	小澤太郎・水原道範
編集機関	久留米市役所 文化観光部 文化財保護課
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 TEL.0942-30-9225 FAX.0942-30-9718
発行年月日	平成18(2006)年2月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
白川遺跡 第3次調査	福岡県久留米市 国分町字白川	40203	030631	33° 17' 32"	130° 32' 21"	20030613 20030630	156m ²	道路建設
白川遺跡 第4次調査	福岡県久留米市 国分町字白川	40203	030631	33° 17' 31"	130° 32' 18"	20030630 20031031	1,052m ²	道路建設

所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物	特 記 事 項
白 川 遺 跡 第 3 次 調 査	集 落 墓 地	平 安 近 世	土 坑 土 壇 墓 溝	3 基 2 基 1 条	縄文土器・石器・土師器・黒色土器・瓦・鉄器・近世～近代陶磁器	平安時代の集落と墓地。
白 川 遺 跡 第 4 次 調 査	集 落	縄 文 平 安 中 世 近 世	土坑 溝 不明	15基 7 条 1 基	縄文土器・石器・土師器・須恵器・瓦器・瓦・輸入陶磁器・鉄器・近世陶磁器	堅穴住居状遺構は、北西側に隣接する筑後国分寺関連の工房や宿泊施設等の可能性あり。
白 川 遺 跡 第 3 次 調 査	土木工事の届出日		平成15年 7 月15日		遺物の発見届出日	平成16年 3 月31日
白 川 遺 跡 第 4 次 調 査	土木工事の届出日		平成15年 7 月15日		遺物の発見届出日	平成16年 3 月31日
白 川 遺 跡 第 3 次 調 査	要 約：半径約300m圏内には、筑後国分寺跡や天長年間創建との伝承がある天台宗鎮護山正福寺や日渡遺跡が存在する。日渡遺跡では、私印と見られる「朝」銘銅印や越州窯系青磁碗、長沙窯系黄釉褐彩水注など10世紀初頭の遺物が出土している。今回、10世紀代の土坑や土壇墓を検出しており、これらとの関係が注目される。土壇墓の存在に加え、立地的にも谷に面しており、集落の周縁部に当たるものと考えられる。					
白 川 遺 跡 第 4 次 調 査	要 約：谷に向けて岬状に突出した低台地上から、縄文後期の土坑を検出した。西側の谷部には、後期のドングリビットや編カゴ等を多数出土した正福寺遺跡第7次調査地点が位置する。ここは、東と南からの湧水が合流する水量が豊富な地点であり、重要な生産拠点としての役割を果たしていたものと考えられる。付近の縄文遺跡は、この谷部を中心に取り巻くように立地しており、本遺跡はその一角を構成するものと思われる。					

※北緯・東経は「世界測地系」に基づく数値。

日渡遺跡群Ⅳ—白川遺跡第3・4次調査—

久留米市文化財調査報告書 第224集

平成18(2006)年2月28日発行

発行：久留米市教育委員会

編集：久留米市役所文化観光部文化財保護課

印刷：香和印刷株式会社

